

健康長寿を実現する
北摂市民による住民参加型プロジェクト
報告書



大阪大学 Innovation Bridge グラント
【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】

健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト報告書

研究代表者：深尾葉子

大阪大学 Innovation Bridge グラント

【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】

はじめに

研究代表者
大阪大学言語文化研究科
教授 深尾葉子

箕面・間谷キャンパス跡地の未来に向けて

1921年、海運業で財をなした大阪の資産家林竹三郎の遺志を継ぎ大阪の国際化の発展のために、と林蝶子夫人が当時の文部省に100万円を寄付して創設された大阪外国語学校。その後大阪外事専門学校と名前を変え、終戦の1949年に大阪上本町にて大阪外国語大学としてスタートする。その30年後の1979年に手狭な上六学舎より箕面市栗生間谷に移転して今年でちょうど40年目となる。

移転当初の栗生間谷は、大阪平野から関電学園のある清水、豊川の山を越えて少し奥まったところにあり、山に囲まれた美しい村落景観が色濃く残る場所であった。大阪外国語大学が位置するのは、そこでも最も茨木寄りの山の中腹で急峻な谷を埋め立て、尾根筋を削っての大工事であった。当時交通網の整備もなく、周辺につくられた栗生団地まで阪急バスに乗り、そこから徒歩で20分急な斜面を登っての通学であったという。夜間主も持つ都市型の大学が、早朝には鹿が散歩し、豊かな野鳥の囀りに包まれるこの間谷の地に移転するという決断は候補地をめぐってさまざまなプロセスがあったとされているが、相当な覚悟を必要とするものであったと思う。

千里中央から40分近くかかり、JR茨木からは山麓線とよばれる山のふもとを走るバスが一日に数本しかない、という環境。国道171号線小野原からは急ぎ足であるいても起伏の多い道を20分はかかる。アルバイトをこなしながらハードな授業を消化せねばならない学生、さらには昼だけでなく夜の授業も持たねばならない教員、早朝から出勤せねばならない職員にとっては何もかもが新しい挑戦であった。また山に面してキャンパスの一番北側に立てられた学生寮に住む学生は、買い物に行こうにも宮ノ前まで店はなく、自転車をなんとかか入手して週に何度か買い出しにゆくのが精いっぱい。毎年世界各地から訪れる国費留学生も、大阪と聞いて留学したものの、自然豊かで商業施設などまったくない大学キャンパスに戸惑う学生も少なからずいた。

しかし、そういう環境であればこそ、学生同士、学生と教員の関係は密度が濃く、また豊かな自然に囲まれた学内の生協や留学生会館、図書館や体育館といった施設を利用しての学生生活はたくさんの思い出が詰まる場所として、在校生、卒業生、教職員、留学生、すべての関係者の大切な場所として記憶されている。

その間谷キャンパスがあと2年を経ずして幕を閉じる。

そもそも大阪大学との統合によりいずれはキャンパスの移転もあり得ることは理解していたとはいえ、急な決定に教職員、在校生、卒業生ともに息をのんだ。最後に一目見ようとキャンパスを訪れるもの、新しいキャンパスに希望をつないで、現在のキャンパスについてはどうすることもできないから、と考えるのをやめてしまうもの、さまざまな思いが交錯するなか、私は昨年春に、10年余所属した豊中キャンパスの経済学研究科からもとのこの間谷キャンパスへと移籍によって戻って来た。そこで目にしたのは、圧倒的に恵まれた環境、清浄な空気、爽やかな風、中庭に見事に茂るシンボルツリーの檜の木、図書館や研究室、中庭の階段から見る大阪平野の眺め

という、美しく快適で、年月を経て成熟したキャンパスの様子であった。統合後バスの利便性の拡大やモノレール開通により、以前よりはるかにアクセスのよくなった間谷キャンパスは、かつてとは比べ物にならないほど便利で美しい姿へと変貌していた。そしてその跡地について、現有の建築物や残された自然が活かされ、国際的なつながりをはぐくんできた大阪外大および大阪大学外国語学部の伝統を受け継いだ利用の可能性はないものか、と多くの人々が考えていた。

本プロジェクトはそういう歴史的な時間に、わずか一年間というタイムスケジュールでスタートした。その核となったのは、私と同じ年に大阪外国語大学に入学し、以来このキャンパスを拠点にモンゴル研究と日本の地域社会や経済を研究してきた同僚の今岡良子氏であった。このキャンパスにすでに40年関わって来た二人の教員が、これまで培ってきた地域のネットワークや教職員のつながり、学生や卒業生との関係を駆使し、多くの方の協力を得ながら企画し、実行してきたこのプロジェクト。その意味と可能性をここで振り返りたい。

1、たちはだかった困難

跡地利用という非常にハードコアなプロジェクトに対して、我々大学関係者は何ら利害関係も持たない。もちろん、箕面市と大阪大学とのあいだでは、現有の箕面キャンパスの跡地利用に関しても相互に協力して進めてゆく、という覚え書きは取り交わされているというものの、それは大学当局と箕面市が取り結んだものであり、現場で長くかかわってきた旧大阪外大の関係者は、その思いとはうらはらに、あらゆる面でまったくの部外者であった。

しかし、「部外者」であるという点では、近隣の地元住民も同じ思いを抱いていた。開発の方向性をめぐって開かれた議論の場があるわけではなく、たとえあったとしても莫大な資金と実行力を必要とするものである以上、一般市民には手が出せない。

しかもこの土地の買収をめぐって取り交わされた100億円ものお金を回収せねばならないという命題もある。

そうした中で、多少なりともこの土地やこの場所に関りを持ち、思い入れを持ち、また今後の利用に関心を持つものが、思い思いの意見をもちよって、自由に将来像を描く場があってもよいのではないか。そういう場を、大学という学問の場で提供することは意義があるのではないか、そのように考え、学内のイノベーションングラントという資金を活用させていただいて「場を開く」こととした。

2、健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト

箕面市は例にもれず少子高齢化が急速に進行する自治体である。21世紀の高齢化は過疎の田舎の地域ではなく、大都市近郊の都市でもっとも顕著に進行すると言われており、箕面市も例外ではない。そんな中高齢者が他の年齢層と交わりながら健康で生きがいをもって生きるための地域づくりの拠点として、この間谷キャンパスの跡地の利用を考えることは極めて理にかなったものである。

そのコンセプトは豊かな自然に恵まれたこの粟生間谷で、残された自然をできるだけ活かし、この地にもともとあった植物資源や、豊かな環境を生かして、都市に近接する健康回復拠点としての、医療、介護、セラピー、カフェ、スポーツ施設、さらには大阪外大の培ってきた国際性を

生かす、インバウンド滞在型の健康施設、地域の住民と多文化が交流しあえるような多文化レストランなどを併設する総合的な施設群がこの地に構想できないか、というものである。

具体的には統合医療拠点や、介護実習の機能を備えた外国人研修施設、専門学校、多文化カフェ、レストラン、アニマルセラピー、ホースセラピー場、滞在型施設、ゆずなどのアロマを利用したリラクゼーション施設、といった住民の健康増進につながる北摂の拠点としての跡地利用プランが次々と寄せられた。

当初プロジェクトのスタート時には、関心を持つ企業、業者、市民団体なども参画し、具体的な土地利用案や今後の入札への提案づくりを企図していたが、開発そのもののタイムスケジュールがまったく見えず、箕面市からの情報開示もままならない中、具体的プランの実現という形では何も進めることができないということが判った。つまりスタート時点で当初予定していたさまざまなプランが、実際には実行不可能であることが判り、まったく白紙に近い状態からスタートせねばならないとわかった。

そこで代わりに着手したのが、人々が潜在的にもっているイメージを具現化させるようなイベントの企画と実行、そこに集まった人々からさまざまな意見を集約し、実際にこんな活動ができる場があったらいいな、というイメージを出し合い、その中から新たなビジネスシーズを探れないかというものであった。キーワードは高齢化時代に、豊かで開かれた生活の場を創りだし、地域の人々が世界の人々と交わりあいながら、動物や自然と接し、健康を維持回復するような拠点づくり、である。

3、動物の力を借りる

そこでまず島根県のホースセラピー場¹からポーランド産の馬車と体重1トンの輓馬のアズール君にきてもらい、阪大箕面キャンパスで秋の一日馬車体験イベントを開催した。当日午前午後と400人近くが駆けつけ、一度に10名が乗れる馬車でグランド外周の道を20往復してもらったものの、半分の200人しか乗ることができず、乗れなかった人は馬に触れたり、ホースセラピーのお話を聞いたり、馬車を追いかけて走ったりしながら、待ち時間を過ごすための、エスニック料理や羊毛加工などのワークショップに参加した。このイベントは大都市周辺で必要な施設として注目されているホースセラピー場をこのキャンパスの一角に誘致できないかという目論みで企画したもので、地元のミニコミ誌や自治会などを通じて参加を呼び掛けたところ多数の子供連れの方が休日の大学のキャンパスに詰めかけた。

馬は、自動車が普及するまで、ずっと長く人間のすぐそばで、人間を運んだり荷物を運んだり、日常の移動手段として人間と生活を共にしてきたが、過去100年、ガソリンで走る車が普及するにしたがって、まったく利用されなくなり、農作業や林業伐採などで馬を利用することもほとんどなくなってしまいました。しかし、つい数十年前まで私たちの生活空間のすぐ近くには馬小屋があり、馬が街を歩いている風景は決して珍しくはなかった。どんな人間でも、自分に危害を加えようとしなければ、分け隔てなく接し役に立とうとする。そういう役畜と人間は長く共に生活をしてきた。

¹ ここは他力塾といってアフタースクールケアや高校卒業資格取得をめざす全寮制のオルタナティブスクール活動を展開している。<https://www.tarikijyuku.org/>

近年登校拒否やうつ病、さまざまな精神疾患により社会生活の継続が困難な人々が激増している。また認知症や身体の不自由な高齢者も増え続け、施設には重度の患者さんが溢れている。しかし、そういう施設に週に一度でも犬や猫といった動物たちが訪れ、動物と触れ合う時間を持つことにより、高齢者の人々の反応が活性化したり、身体が動くようになる、といった事例は多数報告されている。また登校拒否やうつに悩まされる人たちも動物と触れ合うことで人間とは異なるコミュニケーションの道がひらかれ、精神を回復し、能動性を回復する効果があることも確認されている²。うつや認知症などに至っていなくても、仕事やハラスメントやコミュニケーションの疲れにより精神が委縮したり、生きる力が減退したりしている場合、動物との触れ合いは、生命力を回復する作用を発揮する。しかも日本の場合アフタースクールケアとして、保険負担でホースセラピーが受けられるシステムがあるため、大都市の近郊には一定数のホースセラピー場が必要とされており運用的にも安定的な需要が確保できている。ホースセラピー場には馬車をひくことのできる馬を飼うことも可能であるため、間谷と彩都をつなぐこの地に馬車が走れば、セラピーだけでなく、観光、イベント、結婚式などさまざまな用途に馬車を活用することも可能だ。

さらに現在各自治体で野良猫野良犬の殺処分が問題となっているが、そうした愛護センターの犬猫を、譲渡による引き渡しを前提としながら、セラピーキャット、セラピードッグとして周辺医療施設や学校などに赴いてアニマルセラピーとして活用するといった活動も考えられる。鹿児島島の元看護師の女性が、保護猫保護犬を引き取ってアニマルセラピーとして老人施設、障害者施設、学校などを巡回する仕事を展開しており、動物たちの力を借りて、人間が生きる仕事を作り出すイノベーションの実践を行っている³。

それ以外にもヤギやウシを飼うことで除草剤を用いることなく除草できるというビジネスもある。除草剤はベトナム戦争時に用いられた枯葉剤であるため、奇形や内分泌異常、発がん性などが報告されており、草地の土壌汚染、水質汚染、虫や鳥などの小動物の死滅、といった非常に破壊的作用を持つものである。それも人力でやろうとするのではなく、動物の力を借りることで、人にも自然にも害のない形で草刈りができる。

こうした新たな時代における動物との共生モデルを、ここ箕面間谷の地で実現することはできないだろうか。人間は今日異様なまでに肥大化し、他の動物や植物を顧みず自らの力だけで地球上を制覇しようかのような錯覚を抱いている。しかし現実には我々は生命の限りない連鎖の上に

² 神戸市のフルーツフラワーパークに隣接する牧場で馬の暮らし方セラピーを展開する「里馬」はアフタースクールケアなどで現在多くの子どもたちや大人たちのケアを展開しており、<https://satouma.com/>現在近接する宝塚市においても馬と暮らす「馬っこ」がホースセラピー場を設立する準備活動を行っている <https://coubic.com/umacco>。

³もと看護師であった女性が今から十数年前、たった一人で犬猫セラピーの会社を立ち上げ、看護師時代のネットワークを活かして、保護猫保護犬数十匹を引き取り、セラピーキャット、セラピードッグとして養成し、障害者施設や老人介護施設、認知症病棟、学校などを訪問する活動を展開している。保護猫保護犬シェルターとしてだけではなく、引き取った犬猫に人間のセラピーとして活躍してもらおう場を提供している。 <http://www5.synapse.ne.jp/mauruuru/>

こそ日々の命を繋いでいるのであり、その生命の連鎖とつながりを実感することのできる動物や他の生き物との交流やその交流で培われるリテラシー（知識やノウハウ）を持つことが何よりも必要とされている。

4、植物の力を借りる

この地はかつて、豊かな山が覆っていた。その山はいわゆる里山で人々が薪炭林として活用したり、ゆず、山椒などを収穫し、活かす里山経済が営まれていた。これらの里山の資源を活用し、現代に活かす試みとして、箕面の実生ゆずを活用したアロマセラピー、リラクゼーションを実践している会社がある。その会社を創設した岡山栄子さんと大阪大学総合学術博物館の特任講師で薬学の専門で自身もアロマセラピーの研究を行っていた伊藤謙氏、さらに日本各地に中国大陸から柑橘がどのように伝播してきたのかを研究されている京都大学大学院農学研究科名誉教授の北島宣氏に、箕面北摂一帯で古来より利用されてきた植物の力を借りた健康長寿のセラピーについて講演していただいた。箕面は滝の道ゆずくんが箕面商工会議所公認のキャラクターとなっているが、実際に箕面の実生ゆずがどのようなものか、どのような薬効があり、どのように利用できるのかを知っている人は多くない。実はゆずには、老化防止、皮膚のトラブルの軽減、美肌美白などさまざまな効用があり、皮、実、わた、種、どれをとっても捨てる場所がない。このほかにもビワの木ももともと多く植えられており、ビワの葉、実、の活用がされてきた。箕面ではビワもゆずも止々呂美地区での生産が現在でも行われている。こうした在来資源を活用した健康拠点を作り出し、地域に根差したヘルスケアを地域の人々が享受できる場を創り出すことも地域の自然と、生活と産業が一体化する一つの在り方ではないだろうか？

5、地域を開く、地域で開く

この地は、40年前に大阪外国語大学が移転してきてから、多数の外国人留学生を受け入れ、ホストファミリーなどを通じて地域との交流を培ってきた。現在は箕面市多文化交流センターを拠点に、国際学校や阪大の留学生との交流、つながりの活性化に重要な役割を果たしている。そのセンターのセンター長も大阪外国語大学卒業生で、今回の一連のイベントの第一回に、箕面における国際交流の歴史と課題についてご自身の経験をもとにお話しいただいた。北摂は外国人の居住者も多く、今後も大阪北部の恵まれた自然と学術拠点の多く点在する地の利を活かして世界から人々が訪れる場所として潜在力を持っている。この外国語大学跡地においても、そうした地の利を活かし、地域の人々が享受する健康長寿の拠点であるばかりでなく、海外からこの地を目指して人々が訪れ、短期長期で滞在して、健康な生活を送るための拠点として活用することも期待されている。いわゆるインバウンドツーリズムの拠点として、京都大阪に近接し、外国人に人気のある箕面の滝なども抱える場として、今後、より開かれた地域として活用してゆく視野が必要とされていると思う。そのために、大阪外大、そして現在の阪大外国語学部が培ってきた、諸外国の地域理解、多文化理解のノウハウを活かし、ことに訪日観光客の主流である中国（香港）、韓国、台湾など近隣諸国や地域への相互理解や相互交流を深め、お互いがその特徴を活かせる共存の在り方を模索する拠点としても重要な意味を持つと考えている。そのために、今回、「等身大」の中国を理解し、中国に「等身大」の日本を知らせる活動を行っている中島恵さんと唐辛子さん

(ペンネーム)にお話しいただく会を持った。ことに近隣諸国とはその経済上、交流上の重要性和相反するように歴史的な負の感情や敵対心が醸成されやすく、地域を外に開くうえで相互理解の不足による敵意を除去することは今後の同地域の国際化を進める上で極めて重要な試みである。大阪大学においても留学生の過半がこれらの近隣諸国からを占めており、その意味でも今後より活発化した地域レベルの交流が必要とされている。こうした近隣諸国からの人材や資金の流入は少子化の進む日本にとっては何よりも重要な資源であり財産となり得ることを改めて認識する必要がある。

6、今回できなかったこと

当初計画の中に盛り込まれていて、今回実現できなかったことがある。それは間谷キャンパスのグラウンドを利用して、子供たちや成人、そして高齢者向けのサッカー教室を開くという試みだ。実現困難となった理由は、本プロジェクトの対外的な架け橋として協力をお願いしていた AID JAPAN(元大阪外国語大学留学生のケルビン・ウー氏が代表取締役を務める投資コンサル会社)が大規模な組織替えを行ったことにより、当初予定していた協力が得られなくなってしまったからである。当初、AID JAPAN 経由で協力を申し出てくださっていた元サッカー選手の釜本邦茂氏は、この地にあらゆる世代が参加できるサッカー教育の拠点をつくることを前向きに考えておられた。一日サッカー教室を通じて、近隣住民に健康増進や地域のスポーツ振興においてサッカーが果たす意義について認識を高めてもらいたいと、具体的日程の調整も進めようとしていたところ、急きょ本プロジェクトでの一日サッカー教室実現が困難となった。しかし、箕面キャンパスの体育館、グラウンドは箕面市にとっても貴重な資産となるため、ぜひ今後ともこうした他にはない活用の方向性が模索されることを期待している。

さらにわずか一か月弱の告知期間であったにもかかわらず、400人に上る市民が駆けつけた馬車イベントについても、当日馬車に乗れなかった子供たちの期待に応えるべく、アンコール開催ができないかと考えたが、それも経費面、日程面で叶わなかった。しかし、今回この報告書にも盛り込まれているように、たくさんの子供や大人が馬を見るためにやってきて、馬車に乗って楽しい一日を過ごしたこと、その日に同時開催されたさまざまな多文化イベントや食体験で得た経験は多くの人々の記憶に刻まれていると思う。そして何よりも秋とはいえまだ暑い日、グラウンドの周りを20往復もしてくれた体重1トンの輓馬、アズールくんが、その重労働にもかかわらず、子供たちの歓声に包まれてとても生き生きと本当に張り切ってその日の仕事をまっとうしてくれたことを聞き、子供たちと馬の触れ合いがもつ人と動物のかけがえのないコミュニケーションが生まれたのだということを実感した。

一年間にわたるこのプロジェクトが残したものは、毎回のイベントに集まった人々同士の新たな交流とそこから派生したさまざまな取り組み、という新たな関係と活動のシーズの誕生であった。イノベーションというものはあらかじめ想定した計画通りに起きるものではなく、意外なところから意外な展開が生まれ、それが成長し、新たなループを作り出すところに起きるものである。その意味では、ソーシャルイノベーションを企図した本プロジェクトはすでに、大阪大学、旧大阪外大の構成員と、もともとこの地域に住んでいた住民、そして近隣住宅で大学に愛着をも

っておられた住民、さらに新たに誕生した彩都の住民をつなぐ新たなチャンネルを生み出し、そこに開発関係者、業者、この地域の可能性に注目する外部の人たちがつながって、新たなビジネスシーズを生み出しつつある。

その意味では、一年間のさまざまな「仕掛け」がようやく意味を持ち、次へとつながる動きを生み出そうとしている。

7、真のイノベーションとは何か？

日本は今、戦後突き進んできた製造業中心の高度経済成長から新たな時代に突入し、自らの得意分野を認識し、伸ばすことができないまま、緩慢な停滞と危機の時代に生きている。

日本が世界に誇る技術力、産業立国とは、より多くの資源を投入し、より多くの人材を均質化した空間で働かせ、より効率的に、より早く、より大量にモノを供給することによって世界に類をみない創造性と均質性を達成し、人々に印象付けた。しかし、それはかつての村社会から排出され、戦争によって社会の隅々にまでいきわたらされた軍隊式教育、没個性化教育、自分でものを考えるのではなく、命令指令系統のなかで、より効率的に働く人間を育成しようとする戦後復興の努力の中で培われてきたものだ。

その結果、人々が自由な発想で、自由な時間と空間で、多様な文化や社会の交わる中で自らの能力を発揮し、誰のためでもなく、自分とそのまわりの大切な命やつながりのために働き、余暇を楽しみ、自由な精神で繋がりあう仲間と日々の生活や地域社会や政治を作り出す、という場が著しく狭められている。人々の言説空間はメディアによって切り裂かれ、生活時間も人間関係も、何者かによって常に奪い取られてしまっている。その中で起きているのは、人間同士、あるいは人と他の生き物とのつながりが断たれ、その関係性に信頼を持つことのできない人々による、引きこもり、孤独死、自殺、鬱、虐待、暴力、といった負のシグナルの連鎖である。攻撃性を自らの内にこもらせてしまう人は、鬱や引きこもり、孤独死へと向かい、外にむけて露出する人は、暴力、ヘイト、虐待、ハラスメント、支配、脅迫へと駆り立てられてゆく。これらは、平和ではなく戦争へ、繋がりではなく分断へ、寛容ではなく懐疑と攻撃へと向かう道である。

少子高齢化が進み、高齢化した人々がますます助けを必要としている中で、我々は年齢や性別や国籍や学歴などで分断されない新しいつながりの場を地域社会に作り出す必要がある。そのために必要なのは既存の枠組みにとらわれず、「境界を越えて」つながりあう力や仕掛けであり、そのために人間だけではなく、動物や植物や自然の力を借りて我々自身が我々の精神と生きる場を回復する、そういう未来につながる場を自らの手で作り出すことである。

そのためには「福祉の領域」「教育の領域」「自然保護の領域」「産業振興の領域」「文化行政の領域」「スポーツ振興の領域」「国際交流の領域」「多文化理解の領域」といった旧来の領域分担や分断をいったん取り払い、福祉や教育や自然保護や産業振興や文化交流や国際交流や多文化交流やスポーツ振興などが各々自己目的化せず、互いにその活動の場を開いてゆくことから始める必要がある。

具体的には老人ホームを保育所と隣り合わせにし、ことなる世代が交わりいたわりあう場を設ける、あるいは動物のひきとりシェルターと教育、セラピー活動の垣根を取り払い、引き取られた動物たちが、セラピードッグやセラピーキャットとして地域社会で生きられる道を拓く、地域

の除草を動物の力を借りて行う⁴、といった異業種の融合が必要である。また、それらの場所を均質な「日本人」で構成するのではなく、さまざまな文化や価値観を持った人が出入りし、共有し、ともに語り合い享受しあう場を創り出す。それによって切り刻まれた「課題」を融合し、「境界を取り払って」解決するというイノベーションを、生活の隅々で引き起こしてゆく必要がある。

日本第二の湖、霞ヶ浦でコンクリート護岸から自然の浅瀬やそこに生えるアサザという水生植物を絶滅から救うため、地元の小学生や会社や老人に働きかけ、湖との関りを取り戻す活動を繰り広げているソーシャルイノベーター、飯島博⁵は、以下のような独自の言葉を使ってそれを表現する。

自らを場として開く
福祉や教育を目的化しない
壁を膜に変える
壊すのではなく溶かす
物語を作り、紡ぎ出す
龍のように動く線になる

我々人類の特定の集団が地表面への関与の権利を、土地所有や行政の管理区分によって認められ、それを行使することによって、地球上のありとあらゆるところで、物質循環に不可逆的な影響を与え、他の動植物の存亡にかかわる影響を与え、それがめぐりめぐって人類自身の生存環境をも脅かし、地球全体を未曾有の危機に陥れている現状では、旧来の「境界を区切った」管理責任や、権利行使といった概念ではとても現在の危機を乗り越えることはできない。そのなかで生きとし生けるものが、境界を越えて相互に関わりあい、この地球という空間を分け合い、物質を受け渡しあって生きていくことに思いを致し、すべての開発行為や生産、消費行動を地表面の物質循環にいかなるインパクトを与えるのか、そこを共に共有する他の生物はいないか、この土地に愛着を持ち、それを受け継ぐことに一定の役割を果たしている人々はいないか、などに心を配る必要がある。

そういう新たな価値の場における生きるためのプライオリティ（優先順位）や、機械論的世界観ではなく、生命の生きる場としての地球を分け合うためのグローバルリテラシーが欠如した開発行為は、厳に慎まなくてはならない。それは私企業であっても個人であっても国であっても地方自治体であっても、なんら変わることはない。

8、認識の枠組みを超える。フレーミング、アウトフレーミング。

では我々一人ひとりがその只中に生きる行為者としてできることは何か。旧来のように、組織や自らの所属する集団に埋没し、その利益だけを追求し、短期的な収益のみに関心を集中させ、取り返しのつかない地域の財産や遺産を葬り去るのではなく、より開かれた視野を持ち、傍らに暮らす人々とのつながりを取り戻し、その相互作用によって新しい未来の形を、旧来の枠組みに

⁴ ヤギ除草サービスは全国で展開が進んでいる。

<https://www.kaku-ichi.co.jp/media/wildlife/weeding-by-goat>

⁵ 飯島氏はアサザ基金を立ち上げ活動を展開している。<http://www.asaza.jp/about/>

とらわれず、作り出してゆくこと。飯島氏の言葉を借りれば、物語を作り、紡ぎ出す、場を開いて壁を膜に変え、動く線になること。そういうゆるやかでしなやかな人々の動きの中にこそ、開かれた創造の場ははぐくまれてゆくのだろう。

私自身は中国内陸部から飛んでくる黄砂や、その黄砂のもととなる黄土高原の人々の生活、さらにそこで繰り返される生態系回復のためのさまざまな試みや援助プロジェクトなどへの参与観察を通じて、境界を越えて環境問題に取り組むには何が必要か、を研究テーマとしている。過去30年にわたって中国農村や中国各地でのフィールドワークを行いながら、一方で現代日本が直面する課題や問題点と向き合ってきた。そこで得られた私自身の教訓は、自己の思い込みに囚われて外部や他者を認識しないこと、境界を越えて相互作用する際に、自己と他者と自然環境がそれぞれに影響を与えながら変化していることを常に念頭におき、常に目の前に繰り返されている変化と不変に目を向け、それと四つに組むことで、自分の既存の認識枠組みを乗り越えてゆくこと。それこそが、地球に生きる人類が日々日常として、仕事として行為を紡ぎ出すうえでもっとも必要とされていることではないか、ということである。目の前に起きていることを、思い込みに囚われずに認識し、認識の枠組みの外側にとりこぼされていることや、枠組みのせいで見えなくなっている事柄が常に存在することへの怖れと感性を失わないこと、それを私は「アウトフレーミング」ないしは「魂の脱植民地化」と呼んでいる⁶。

我々人類は全地球規模で進行する我々人類自身が持つ深刻な加害作用に日々思いを致し、その犠牲になる命や人々への感性と感覚を持ち続け、つねに境界を越えて相互作用し、新たなフレームを作り出し、まったく新しいコンテキストで対象をとらえる力を獲得すること。それこそが真のイノベーションであると考えている。

昨年まとめた拙著『黄砂の越境マネジメントー黄土・植林・援助を問いなおす』（大阪大学出版会 2018年）の冒頭の「はじめに」で私は以下の言葉を引用した。引用したのは、20世紀アメリカの文化人類学者であり精神医学者であり、社会生態学者であるグレゴリー・ベイトソンの以下の言葉である。

認識の枠組みを狭めて、「自分の関心は自分にあり、自分の種にある」という前提で物を考える時、自身のシステムを支える直接の因果関係のループ以外の関係への配慮はすべて切り落とされる。そして人間の営みがもたらす副産物を、すべてどこかへ捨ててしまおうとする。その際エリー湖はその恰好の捨て場所となる。しかしそこで忘れ去られているのは、エリー湖という生態系が、われわれを取り囲むより大きな生態系の一部であり、認識において、エリー湖を狂気のうちに打ち捨てるならば、我々の思考と経験は、より大きなシステムにおける狂気へとみちびかれてゆくということである（著者訳）。

Bateson Gregory(1972) *Steps to an Ecology of Mind*, The University of Chicago Press.,p.492.

エリー湖とはアメリカの五大湖の一つで1960年代から70年代にかけて、周辺の工業廃水や家庭排水で深刻な汚染に見舞われた湖である。ベイトソンは、それはエリー湖が物理的な捨て

⁶ 拙著『魂の脱植民地化とは何か』青灯社 2012年。

場所であったと同時に、自己の認識枠組みの外に対して、自分に都合の悪いものを捨てる認識的な捨て場所であったことを示している。

現代の我々は多くの不都合な真実に蓋をし、目をつぶり、なかったことにして目の前の自身の生活の安寧と持続を得ようとしている。しかし、実は認識の外に捨てたものは、私たちを支えるより大きな生態系の一部であって、それは自己のよって立つ生存世界を蝕んでいる。そのことを我々は常に知っておく必要がある。そのうえで、認識の枠組みが切り取る世界を越えて、相互理解や相互作用し、そのことを自己の認識枠組みを広げるための糧にする必要がある。そういう人類に必要な壮大な実験場の一つとしてこの箕面の山に抱かれた北摂の地の今後の未来を、ともに考え、作り出してゆく場を引き続き持ち続けてゆきたい。



大阪大学 HP より 「大阪大学箕面キャンパス (2008 年 11 月撮影)」

目次

はじめに	1
1年間で実施したイベント	12
イベント報告【第1弾 箕面で花開く国際交流の実践の輪とこれからの課題】	18
イベント報告【第2弾 野外体験馬車イベント】	19
イベント報告【第3弾 阪大箕面キャンパスと世界を繋ぐ】	21
イベント報告【第4弾 世界に発信！箕面産実生ゆずの魅力】	22
イベント報告【第5弾 日本から見る中国 中国から見る日本～等身大の目線で考える～】	23
イベント報告【第6弾 間谷キャンパス 40年～思い出を語り、未来を語る～】	24
参加者アンケート結果	27
イベントにて配布したアンケート用紙	27
アンケート集計	28
各イベント参加人数	32
個人インタビュー	33
このプロジェクトに参加して	34
箕面発植物の活用～ユズを一例に～	35
大阪外国語大学・大阪大学箕面キャンパスへの思い	37
大阪大学間谷キャンパス（旧大阪外国語大学）跡地利用の考え方	38
フィールドの基点・箕面キャンパス	44
健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクトによせて	45
大阪大学箕面キャンパス発 「ソーシャルイノベーションプロジェクト」に参加して	46
市議、そして、外大にご縁をいただいた家族として	47
プロジェクト申請時の計画	48
今後の展望	49

1年間で実施したイベント

阪大箕面発 — 地域と世界をつなぐ —

ソーシャルイノベーションプロジェクト
第一回 発足記念講演会

箕面で花開く国際交流の 実践の輪とこれからの課題



岩城あすかさん

講演者 岩城あすか氏

箕面市多文化交流センター館長
大阪外国語大学トルコ語出身、トルコ人の
パティシエと結婚、現在箕面在住で20ヶ国
以上の料理を出す **comm café** を運営



深尾葉子准教授

司会 深尾葉子氏 (プロジェクト代表者)

大阪大学言語文化研究科准教授 博士 (経営学)
大阪外国語大学中国語出身。
研究キーワードは、里山のグローバルマネジメント、人間の経
済の再建、魂の脱植民地化。近著に、環境問題の本質を突いた
『黄砂の越境マネジメント』 (阪大出版会, 2018.09) がある。



今岡良子准教授

コーディネーター 今岡良子氏

大阪大学言語文化研究科准教授
大阪外国語大学モンゴル語出身。
研究キーワードは、モンゴル遊牧社会のフィールドワーク。
羊アート作家。

駐車場
あります!

【日時】10月20日(土) 15:00~17:00

【場所】大阪大学 箕面キャンパス B棟 1階 プレゼンテーションルーム

【参加費・申し込み】不要

【問合先】深尾研究室内プロジェクト事務局

TEL 072-730-5196 E-MAIL fukaoken@outlook.jp

どなたでもご参加いただけます。直接会場にお越しください。



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

この講演会は、大阪大学Innovation Bridge Grant【大型産学
共創コンソーシアム組成支援プログラム】の助成を受けています



OPEN 2021

阪大・箕面キャンパスに馬車が来る！

《箕面キャンパス2021年移転 カウントダウン・プロジェクト》

【日時】11月18日（日）11:00 - 16:00 馬車・ゲル組立無料

【集合場所】大阪大学箕面キャンパス **記念会館前**

【問合先】深尾研究室室内プロジェクト事務局

E-MAIL: fukaoken@outlook.jp

お車でのご入構は正門からのみです。

随時参加可
お手伝い募集中



馬頭琴演奏。モンゴルのゲル組み立て、羊毛フェルトの手芸、「さをり織り」のワークショップ。



一部のワークショップと屋台は有料です。

『民族料理屋台』

- ・ウイグル（シシカバブー）
- ・チベット（モモ）
- ・ベトナム（フォー）
- ・モンゴル（ホーシヨール）



『里山ジビエー日レストラン』

- ・シェフによるジビエ料理
- ・鹿肉コロッケ
- ・四国の麦みそ汁



実生ゆずアロマ！



「民族衣装試着体験」
「どんぐりワーク」
「アラビア語プチ講座」
もあるよ！



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

このプロジェクトは、大阪大学Innovation Bridge Grant【大型産学共創
コンソーシアム組成支援プログラム】の助成を受けています。

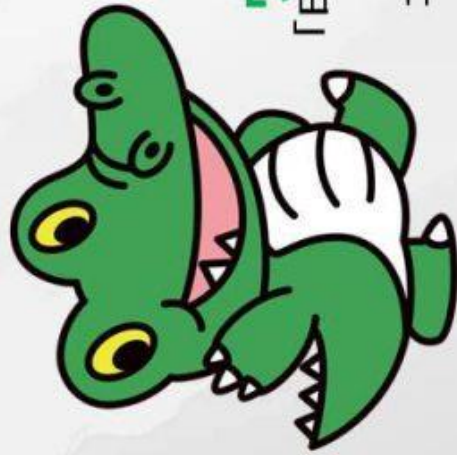
阪大箕面キャンパスと世界をつなぐ

第三弾

日時：2019年1月17日（木）13:30～17:30

会場：大阪大学箕面キャンパス・外国学図書館 AVホール

講師：田原真人氏（マレーシア在住、『Zoom オンライン革命』著者）



インスピレーショントーク

「オンライン対話で世界を繋ぐ」

ー学び・組織・社会のコミュニケーションデザインを変えるー
13:30～15:00

ワークショップーZoomで世界と対話しよう

「日本語で教室と世界をむすぶ・Zoomで世界オンライン街歩き体験」

ースイス・オーストラリア・中国の街かどへー

15:30～17:30

コーディネーター：筒井俊博氏（Zoomによる業務効率化コンサルタント）

一般来聴者歓迎。箕面キャンパスの来し方に思いを馳せ、これからの未来を思い描きながら地域の市民の皆様とともに考える場です。開かれた語学教育、地域研究、文化交流の場をどうすれば実現できるのか、実際に体験しながら、一緒に考えませんか？

【問い合わせ先】大阪大学言語文化研究科 深尾研究室内プロジェクト事務局 E-MAIL: fukaoken@outlook.jp



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

このプロジェクトは、大阪大学Innovation Bridgeグラント【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】の助成を受けています。

～ 阪大箕面キャンパスと世界をつなぐ～ 世界に発信、箕面産実生ゆずの魅力

2019年3月16日(土) 13:30～15:00

大阪大学箕面キャンパス・
大阪外国語大学記念会館

入場無料
予約不要

第4弾

北島 宣氏

農学博士・
京都大学農学研究科名誉教授

柑橘の遺伝子とルーツを研究されています。神話・神社・歴史・風土記などを踏まえたレアで貴重なお話がいっぱい伺えます。



岡山 栄子氏

有限会社re・make代表取締役・
日本統合医療学会(IMJ)正会員

今、北斎と脳卒中で話題!日本特有の柑橘『実生ゆず』にこだわり、未病ケアを探求しています。ワークショップでみなさんも実生ゆずの魅力を体験してください。



(ワークショップ体験料は各500円)

伊藤 謙氏

薬学博士・
大阪大学総合学術博物館特任講師

老人性の睡眠障害・幼児のADHDの治療における天然精油の可能性を研究されています。薬の知識の少ない一般の方にも分かりやすくお話してください。



深尾 葉子准教授

こんにちは。研究代表者の深尾葉子です。第4弾は、講演者の方のお話、交流会、ゆずワークショップの企画です。箕面キャンパスの来し方に思いを馳せ、これからの未来を思い描きながら、開かれた語学教育、地域研究、文化交流の場をどうすれば実現できるのか、実際に体験しながら、一緒に考えませんか?今回、私はアロマの本場フランスからTV中継で参加します!



【問い合わせ先】大阪大学言語文化研究科 深尾研究室内プロジェクト事務局
E-MAIL: fukaoken@outlook.jp

このプロジェクトは、大阪大学Innovation Bridge Grant
【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】の助成を受けています。

日本から見る中国 中国から見る日本

— 等身大の目線で考える —

5月13日（月）13:00～18:00

大阪大学箕面キャンパス内
日本語日本文化教育センター1階 多目的ホール

入場無料
予約不要

★
第5弾



中島 恵
Kei Nakajima

フリージャーナリスト

主な著書



唐 辛子
Xinzi Tang

中国出身コラムニスト
日本在住

主な著書



大阪大学 箕面キャンパスマップ



当日のスケジュール

- 13:00～ 中島恵さん講演
- 14:40～ 唐辛子さん講演
- 16:20～ ディスカッション

ファシリテーター

深尾 葉子
大阪大学 教授



お問い合わせ先

大阪大学言語文化研究科
深尾研究室室内プロジェクト事務局
E-Mail : fukaoken@outlook.jp

会場アクセス

大阪府箕面市栗生間谷東8-1-1
「大阪モノレール」彩都西駅下車西へ徒歩約15分
「阪急バス」阪大外国語学部前or間谷住宅4下車すぐ



このプロジェクトは、大阪大学Innovation Bridge Grant【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】の助成を受けています。



間谷キャンパス40年

— 思い出を語り、未来を語る —



7月6日（土）14:00～16:30

大阪大学箕面キャンパス内
日本語日本文化教育センター1階 多目的ホール
大阪外国語大学記念会館

入場無料
予約不要



これまで、「阪大箕面キャンパスと世界を繋ぐ」と題して、一年間さまざまなイベントを開催してきた本プロジェクト、いよいよ最終イベントの開催となりました。

第一回 箕面市立多文化共生センター館長、岩城あすか氏による箕面市における国際交流事業とご自身の国際化実践のお話から始まり、第二回 箕面キャンパスに馬車が来て動物と子供達がふれあひ多文化を理解するイベント、第三回 Zoomで開く世界とキャンパスとして、教室から世界へ、世界から教室へと繋ぐ試み、第四回 箕面や北摂の里山資源を活かした健康長寿のヘルスケアの試みで、ゆずが開く世界との繋がり、そして、第五回は、日本と中国、誤解の多いこの国の等身大の世界を伝える二人の女性ジャーナリスト、作家に相互理解が開く豊かな世界をそれぞれお話しいただきました。

本年8月をもって終了する予定のこのプロジェクト。フィナーレを飾るイベントとして、来る7月6日に「間谷キャンパス40年—思い出を語り、未来を語る—」を開催！この箕面栗生間谷キャンパスに思い入れの深い本学関係者と近隣の住民、跡地利用に関心のある方々にお集まりいただき、皆さまが主役のシンポジウムを開催いたします。



大阪大学 箕面キャンパスマップ



会場アクセス
大阪府箕面市栗生間谷東8-1-1

「大阪モノレール」彩都西駅下車西へ徒歩約15分／「阪急バス」阪大外国語学部前or間谷住宅4下車すぐ

シンポジウムの後は、 北摂ジビエパーティ！

高槻市のフレンチレストラン「シェフズキッチンカナル」の中西シェフが記念会館のキッチンで腕を振ります！

【時間】17:00～

【費用】1,500円/人

【申込】7月3日までに以下連絡先まで、お名前とご参加人数をお知らせください。

メール:secretariat.yuragi@gmail.com

F A X:072-730-5196

スケジュール

14:00 シンポジウム ※途中休憩有

16:30 グループトーク

17:00 ジビエパーティ ※有料、詳細は上記

外大オケOBによる演奏あり♪

お問い合わせ先

大阪大学言語文化研究科
深尾研究室内プロジェクト事務局
E-Mail: fukaoken@outlook.jp



深尾葉子
大阪大学 教授



このプロジェクトは、大阪大学Innovation Bridge Grant【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】の助成を受けています。

イベント報告【第1弾 箕面で花開く国際交流の実践の輪とこれからの課題】

【日時】2018年10月20日(土) 15:00 ~ 17:00

【場所】大阪大学 箕面キャンパス B棟1階プレゼンテーションルーム

【講師】岩城 あすか氏(箕面市多文化交流センター 館長)

【目的】国際交流の拠点、インバウンドツーリズムの拠点としての可能性を探る

【内容】箕面の国際交流において重要な役割を果たしている箕面市多文化交流センターの館長で、大阪外国語大学卒業の岩城あすか氏に、箕面における国際交流の歴史と課題についてご自身の経験をもとにお話しいただいた。北摂は外国人の居住者も多く、大阪北部の恵まれた自然と多くの学術拠点を併せ持ち、今後も国際交流の拠点として重要な役割を担っていくということだった。これまで箕面の国際化に貢献してきた大阪外大・大阪大学外国語学部のキャンパスが移転した後も、国際交流の場として残ってほしいと意見が出た。



当日の様子

イベント報告【第2弾 野外体験馬車イベント】

【日時】2018年11月18日（日）11:00～16:00

【場所】大阪大学 箕面キャンパス 中庭・B棟一階・記念会館・構内道路

【目的】アニマルセラピーの可能性、文化交流の拠点としての可能性を示す。

【内容】今回のイベントは、「大阪大学箕面キャンパスという土地を受け継ぎ、地域と自然と人と世界をつなぐ拠点に」という、このプロジェクトの中核をなす重要な位置づけのものである。箕面キャンパスの運動場やその外周道路の特性を生かし、馬を活用したアニマルセラピーの可能性を探った。地域住民の方々に馬車に試乗していただき、馬に触って触れ合っていたくことで、馬から得られる癒し効果を体感していただいた。また、異文化交流の一環として各国文化を感じとれる多彩なワークショップを開催し、民族楽器の演奏、ゲルの展示などを行い、地域住民の方々から、箕面キャンパスへの思いや移転後の跡地利用について聞き取りを行った。また、「里山ジビエー日レストラン」において開催した意見交換会では、里山の自然と人間が共存するために、人がどのように自然と関り、管理していくべきなのか、また、キャンパス移転後の跡地はどのように利用していくのが好ましいのかなど、参加者と一緒に話し合うことができた。



当日の様子(乗客が乗った馬車を引くアズール君)



当日の様子(馬頭琴の音色に聞き入る参加者)



当日の様子(機織り体験をする参加者)



当日の様子(珍しい民族料理に列をなす参加者)

イベント報告【第3弾 阪大箕面キャンパスと世界を繋ぐ】

【日時】2019年1月17日（木）13:30～17:30

【場所】大阪大学 箕面キャンパス 外国学図書館4階 AVホール

【講師】田原 真人氏（「Zoom オンライン革命」著者・マレーシア在住）

【目的】開かれた語学教育、地域研究、文化交流の実現可能性を示す。

【内容】前半のインスピレーショントークでは、インターネット会議システム Zoom が、国境や地理的な条件に左右されずに、世界中の人と居ながらにしてコミュニケーションできるという機能を利用して、どのような組織的イノベーションや遠隔地のネットワーク、双方向的対話的な教育が可能になるのか、それがもたらしうる社会変革的意義について、現在おすすめられる事例をもとにお話しいただいた。後半は、実際に、中国、フランス、スイス、スペイン、フィジーなどと教室をつないで、現地で、街歩きしてもらい、双方向的対話を体験するワークショップを行った。会場側でコントロールし、参加者全体と現地とをつないだ双方向的対話の場を作り出し、参加者が Zoom を用いた会議や対話の利便性や可能性を実感するための実践を行った。



当日の様子

イベント報告【第4弾 世界に発信！箕面産実生ゆずの魅力】

【日時】2019年3月16日（土）13:30～15:00

【場所】大阪大学 箕面キャンパス 記念会館

【講師】北島 宣先生(京都大学農学研究科 名誉教授)、岡山 栄子氏(有限会社 re・make 代表)、
伊藤 謙先生(大阪大学総合学術博物館特任講師)

【目的】セラピー拠点の需要および、特に箕面産ゆずを使用したセラピーの可能性を示す。

【内容】里山の資源を活用し、現代に活かす試みとして、箕面の実生ゆずを活用したアロマセラピー、リラクゼーションを実践している有限会社 re・make を創設した岡山栄子氏、薬学の専門で自身もアロマセラピーの研究を行っていた伊藤謙氏、さらに日本各地に中国大陸から柑橘がどのように伝播してきたのかを研究されている北島宣氏に、箕面北摂一帯で古来より利用されてきた植物の力を借りた健康長寿のセラピーについて講演していただいた。会場には柚子の生産に携わっている方もいらっしゃり、フリーディスカッションでは、今後の里山資源の活用や、キャンパス跡地で実現できることについて、議論が盛り上がった。また、参加者向けのゆずヘッドスパやゆず飲料試飲も大変盛況であったため、植物の力を借りたセラピーの需要を確認することができた。



イベント報告【第5弾 日本から見る中国 中国から見る日本～等身大の目線で考える～】

【日時】2019年5月13日（月）13:00～18:00

【場所】大阪大学 箕面キャンパス 日本語日本文化教育センター1階 多目的ホール

【講師】中島 恵氏(フリージャーナリスト)、唐辛子氏(コラムニスト)

【目的】箕面市におけるインバウンド需要と近隣諸国との交流拠点としての可能性を示す。

【内容】北京大学、香港中文大学への留学経験があり、多くの中国人への取材を通して執筆活動をしているフリージャーナリストの中島恵氏による日本人目線の中国、そして、日本に住みながら日本の文化や魅力を中国向けに発信している唐辛子氏による中国人目線の日本、この2視点からのお話を伺うことで、インバウンド需要を探った。箕面市は、街と大自然の近さが魅力で、特に中国からの旅行者に人気であり、今後も来訪者の増加が見込まれること、また、良い関係を築くために相互理解が重要であることが語られ、来場者からは、キャンパス移転後も外国語大学・外国語学部で培われた国際性を残し、国際交流の拠点になればよいとの意見があがった。



当日の様子

イベント報告【第6弾 間谷キャンパス 40年～思い出を語り、未来を語る～】

【日時】2019年7月6日(土) 14:00～16:30

【場所】大阪大学 箕面キャンパス 日本語日本文化教育センター1階 多目的ホール、
大阪外国大学外国語大学記念会館

【目的】近隣住民の方、卒業生、阪大関係者、プロジェクト関係者が集い、大阪大学の過去と未来を共有し、今後の可能性について考える。



当日の様子

【当日の意見票に記載された内容】

粟生間谷東に住んでいる市民です。娘が小さい時から外大に通ういろいろな国の留学生を見たり(散歩中)、外大のグラウンドや体育館で一緒にクラブに参加させていただいたり、そこで外国人と自然に接することができたと思います。おかげさまで、今は娘は国際基督教大学へ、幼馴染の友人(外大でよく遊んでいた友人)は阪大外国語学部へ通っています。このキャンパスには思い出が多く、ぜひとも緑を最大限に残し、国際的な福祉施設、老人と子供たちが交流できるような施設、老人ホーム、幼稚園、保育所、医療施設等ができればと願っています。

跡地について、現状の情報を得たく、参加させていただきましたが、会議の趣旨とは異なったようです。大学が移転してきたころの対立の話とか、粟生間谷遺跡の話とか、大変興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。

16年前から阪大に勤めています。最初に外大キャンパスに来たときは、裏山はまだ「山」でした。気が付くと裏山はいつの間にか住宅地に様変わり、地域が変わっていくことは仕方がない面もあるけど、味気のない住宅地とは異なる地域の発展も可能だっただけに残念に思います。キャンパスの跡地が味気のない住宅地になってしまわないことを切に願っています。

新しいプロジェクトの情報公開を十分にしておパブリックコメントの内容を充実させる方法はできないか？

夏まつりの盆踊りに最初より浴衣の着方、盆踊りの指導協力できたことに思い出がたくさんあります。毎年変わる生徒が引き継ぎをきちんとしており礼儀正しい生徒たちに若い人に教えられること多々ありました。卒後の活動の場の一環にぜひ施設の保存を望みます。

大阪外大の大切な思い出等を聞いて、その歴史を無駄にはいけないのかなと思いました。せめて、大阪外大の痕跡を残した跡地利用を考えてほしいと…

素敵な企画をありがとうございました。所用があって十分参加できませんが、参加者の皆さんが満足そうなお顔でよかったです。この campus の桜の季節が大好きです。

深尾さんと 2 か月くらい前に知り合い、いきなり参加させていただきました。こちらのキャンパスも初めてで、阪大とのかかわりはほぼないのですが……。鷺田清一先生に教わったことくらいです。高槻・榎田という最北端の地で、知的障がい者の施設を運営する中、地域おこしのためホースセラピーをやりたい！というところで深尾さんと意気投合しました。榎田も柚子の取れる地域なので、何か柚子の名物を作れないかなと思いました。★住んでいる人の暮らしよりもお金、というやり方には疑問を感じますね。いろんな人の思い出の地を、よい形で活用してほしいです。

グラウンドのオープンに合わせて箕面 JC 主催国際大運動会を開催したこと、良い思い出です。恩師がいまして移転前から 40 数年のお付き合いです。その想いを生かしたい。箕面市商連会長、観光部会長、農業委員や社会福祉(箕面市社協役員)などの立場で行政に意見を申し入れています。

私は、移転前 3 年 4 か月は大阪市内天王寺区上本町キャンパスで学生と食堂アルバイトで過ごしました。移転時に「バスを大学内まで」運動をし、実現しました。当時は学生自治会活動で大学と交渉していました。その後、移転(1979 年 8 月)、学校オープン(9 月)。その時食堂の正職員になり、移転後の食堂で 10 年働きました。その中で、大学は 8 年で卒業しましたが、移転後のキャンパスは教室の思い出はほとんどありません。

キャンパスはキャンパスのまま市民に活用を。まだまだこの地震の中であまり被害のない建物ならば使うべし。市役所の一部が移転してもいい。教育住民環境に活用を。癒しを求める子供・市民のために使えばいい。

コンサルタントは全く必要ない。市民プロジェクト使えば…

間谷住宅に住んで 40 年以上になりますが、その間外大(今も阪大ではなく)はいつも身近にありました。今は道を隔てた真横に住んでいます。夜の散歩も治安が良く、管理が行き届いている外大キャンパスは貴重な存在です。今から 10 年前は科目履修生として 3 年間学生として楽しく過ごしました。今後はこの広大な自然を残した文化施設として残ってほしいと願っています。

間谷住宅に住みました時は、ワラビ、ぜんまい等、昔の里山の採集する楽しみがありました。小川には沢蟹もいました。人口が減少するのですから、できましたら、元に戻すことが良いのでは。

長い間、国際交流で世界各地の人と交流できたことを感謝します。世界が広がりました。今でも交流しています。学校では、生協、図書館等使わせていただきました。跡地のことが気にかかるので、ほっとけないと参加しています。生い茂った自然等いろいろと残したいものがあります。

大学が移転してこられて以来、私にとっては大学は憩いの場でした。特に裏山がなくなってからが、自然を感じられるかけがえのない場所です。大島桜をはじめとしてのいろいろの桜、ケヤキの大木、シナサワグルミ、ヤマモモ…朱火や蕨も見られます。外国の方々ともたくさん知り合いました。ここがなくなることは寂しいことですが、何とか自然を守って子供も老人も利用できるような施設に変わってくれることを願っています。大学の中にこのような動きがあることをもっと早く知っていたら力強かったのにと思っています。

箕面キャンパスの移転についての詳しいことは今日の集まりで知りました。残念でなりません。

S49 から間谷住宅に住み始め、大阪外大がこの間谷に移転されたときのことを懐かしく思い出されます。子供は友達とよく遊びに行ったりしていましたが、私自身キャンパスに入ることなく数年過ごしました。縁ありまして H4 年から大阪外大で働くようになりました。それから H27 年まで外大・阪大と働かせていただき、私にとっては思い出いっぱいのキャンパスです。A 棟から E 棟までよく走り回りました。(仕事で)

そのキャンパスがなくなってしまうのはとても寂しいですし、残念です。

国立大学のある住宅地なので、住環境が良いと思い引っ越してきました。確かに通り抜けの車が無く、学生が行き交う良いところだと思います。その環境を続けてほしい、学校がなくても。

箕面市民の方をはじめ、この地に思い出や関係のある方の納得感のある結果が出せたらいいなと思います。

良くも悪くも近くに他に行くところがないので、4 年間密に過ごした場所でした。寂しい限りです...

参加者アンケート結果

イベントにて配布したアンケート用紙

阪大箕面発
—地域と世界をつなぐ—
ソーシャルイノベーションプロジェクト
第六回 間谷キャンパス四〇年

本日はお越しいただきありがとうございました。
お時間がありましたら、アンケートにご協力をお願いします。

① 本日のイベントは何でお知りになりましたか。当てはまるものにチェックや○をお願いします。

- ▲ 知人に誘われて
(プロジェクトメンバー/今日の講師/大学の知人/箕面市民の知人/その他)
- ▲ ポスターやチラシを見て
(学内で配布、掲載されたもの/MAFGA で掲示されたもの/その他)
- ▲ Facebook の宣伝のページを見て
- ▲ その他 ()

② 本日のイベントはいかがでしたか?一番印象深いコーナーは何ですか?ご感想や主催者へのメッセージがあればお書きください。

③ キャンパス跡地利用に関して、何か期待することや意見があればお書きください。

④ 大阪大学箕面キャンパスのこれまでとこれからについて、広く市民の皆様や、今後の土地利用にかかわる方たちとの対話と意見交換の場を作っていきたいと思っております。希望するセミナーの内容やイベントなどありましたら、お知らせください。

裏面に続く

⑤ これまでの人生で、箕面キャンパスに思い出や記憶があれば自由にお書きください。(地図に場所を矢印でマークしてください)



よろしければ、

1. お名前 :
2. ご所属など : 当てはまるものにチェックや○などを記入してください。
 - ▲ 箕面市民 (間谷住宅/彩都/粟生団地/小野原、その他)
 - ▲ 箕面市以外から来られた方 ()
 - ▲ 外国語学部卒業生 (年度 語卒)
 - ▲ 学生 (語専攻)
 - ▲ 院生 (研究科 語)
 - ▲ 大阪大学教職員 (教員/職員)
 - ▲ その他 ()

差し支えなければ、連絡先(メールアドレスなど可能であれば、今後のイベント情報をお知らせさせていただきます)をご記入ください。それ以外の目的には使いませんのでご安心ください。

3. 連絡先 :

アンケートのご協力ありがとうございました。

アンケート集計

【跡地利用に関する意見】

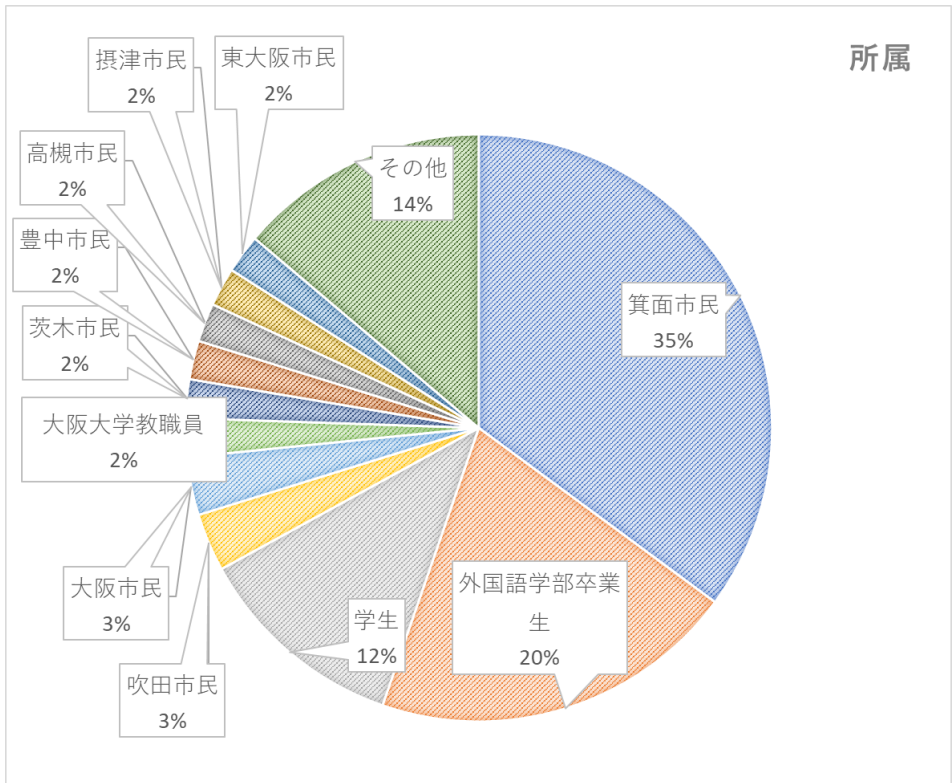
- ・早めに次の施設を作って、空き地である時間を短くしてください。スポーツ施設や、図書館、レストラン等があると嬉しいです。(箕面市民 彩都)
- ・図書館、スポーツ施設(箕面市民 彩都)
- ・スポーツ施設を含めた公共複合施設(箕面市民 彩都)
- ・馬と触れ合える場所に(記載なし)
- ・病院や学校、公園や図書館などの施設。住宅地にはしてほしくないです。(箕面市民)
- ・学生寮とクラブ活動のできるように、大学生のために利用されてはどうでしょうか。(記載なし)
- ・子どもが遊べる施設になるとうれしい。(記載なし)
- ・もう少し食べ物のお店があればいいなと思いました(箕面市民)
- ・イベント、勉強(外国語学部卒業生)
- ・国際的な交流、イベントの場にしたい。(外国語学部卒業生)
- ・自分が学んだキャンパスがなくなるのは寂しく、なるべく校舎等保存する方向で活用していただけるとうれしく存じます。(外国語学部卒業生)
- ・市民や子供達が集える場所(記載なし)
- ・市民が参加できるイベントを増やしてほしい(茨木市民)
- ・交通アクセスが悪い場所ですので、イベントにしても何に使えるのか不明。(記載なし)
- ・高台なのでけしきを楽しめる場所(箕面市民)
- ・周辺住民の文化的生活に寄与する施設になればうれしいです。(箕面市民 彩都)
- ・子供向けの施設、習い事など。(箕面市民 小野原)
- ・外大時の国際的な施設としての文化は残ってほしいと思います。(記載なし)
- ・ケヤキや図書館は残してほしい気がします。(外国語学部卒業生)
- ・スポーツセンター、公園、プール(箕面市民 間谷住宅)
- ・市民プール、公園(箕面市民 間谷住宅)
- ・子供向けイベントや教室など(記載なし)
- ・この地域の方が交流できて楽しめるよう、文化交流の拠点として利用してほしいと思います。卒業生の願いです。(外国語学部卒業生)
- ・なんとか学生が住めるような条件を考えてほしい(外国語学部卒業生)
- ・人が集まれるスポーツ or 文化施設にしてほしい。(箕面市民 彩都)
- ・せっかくの広大な自然を生かした施設を作してほしい。(箕面市民 間谷住宅)
- ・記念会館の建物は残してほしいです。(外国語学部卒業生)
- ・今も月に1回スワヒリ語の勉強会を箕面キャンパスで開催しています。少なくとも記念会館は残していただきたいと思います。卒業生が集えるように...(外国語学部卒業生)
- ・市民にも使えるようにしてほしい(箕面市民 栗生間谷)
- ・すごく整備された恵まれた環境だと思うので、学ぶ場として残してほしいです。(箕面市民)
- ・スポーツや子供が楽しめる方向に利用してほしい。(箕面市民)

- ・地域住民に開放した文化センターなどの設置を期待します。(記載なし)
- ・最近彩都に引っ越してきましたが、国際文化都市という特徴を生かして、外国人と日本人との交流場所になるとうれしいです。(彩都)
- ・立派な建物、有効活用できればいいのでは(記載なし)
- ・移転には今でも反対です。(箕面市民 彩都)
- ・彩都住民としては、多くの車が住宅地に入ってくることを望んでおりません。171～彩都への道からつながるような道を作っていただく etc.の配慮をお願いしたい。本当は大学に残ってほしいんですけどね(箕面市民 彩都)
- ・建物やレイアウト等残しつつ小さな会社等が入るコワーキングスペースなどの活用があれば楽しそうです。(伊丹市民)
- ・スポーツ関連施設ができるなど噂を聞いていますが、介護予防のための老人福祉分野でのリハビリデイ(「コグニサイズ」など認知症予防とエクササイズを組み合わせたやつ)が注目されつつあると思うので、そういのできる場所を作ったらいいと思う。図書館そのまま利用できるよう残したらいいと思う。桜の木が立派なので残してほしいです。(箕面市民 彩都)
- ・留学生か留学生の親が来た時に泊まれるスペース、子供たちの学習の場(泊り学習、留学生が無料勉強会をする)(外国語学部在学)
- ・自然や文化を大切に残してほしい。(摂津市民)
- ・教育に関するところへ(摂津市民)
- ・学校や研究所になればと思います。それこそ、運動場を藁草畑にし、統合医療の研究所になればと思います。役行者、実生ゆずとの縁もあることですし。(箕面市民 栗生間谷)
- ・民間に開放し、ワーケーションの拠点にならないか? 「周りに緑が多いが、都市に近い」という強みを生かせる広大な施設だと思います。(記載なし)
- ・学問や青少年育成のために役立つこと(在学生の保護者)
- ・箕面市民が活用できる施設(スポーツ施設を含む)(記載なし)
- ・せっかくのロケーション、外国語学部という特色を生かしつつ、地域への言語や文化の交流など…(池田市民)
- ・自然を有効活用してほしい。(外国語学部在学)
- ・サバイバルゲームの会場にしましょう。「大阪外大の歴史をまとめたミュージアム」などは需要がなさそう。(外国語学部在学)
- ・自然を残したい。(箕面市民 間谷住宅)
- ・市民の意見の反映が一番の優先(箕面市民)
- ・外大キャンパスがはぐくんできた国際性と知の拠点としての持ち味を生かした跡地利用を行ってほしいと思う。(大学教職員)
- ・キャンパス内のあちこちにあるヤマモモの木をぜひ残していただきたい。かつての里山の境界を示す貴重な遺産です(元大学教職員)
- ・卒業生や関わってこられた方の想いを活かし、地域の人の集える場として自然と触れ合える環境を残せるといいですね。何かができるわけではないですが、応援したいです。(高槻市民)
- ・経済優先ではなく、環境・文化を守るという視点で住民の要望も踏まえて進めてほしい。(箕面)

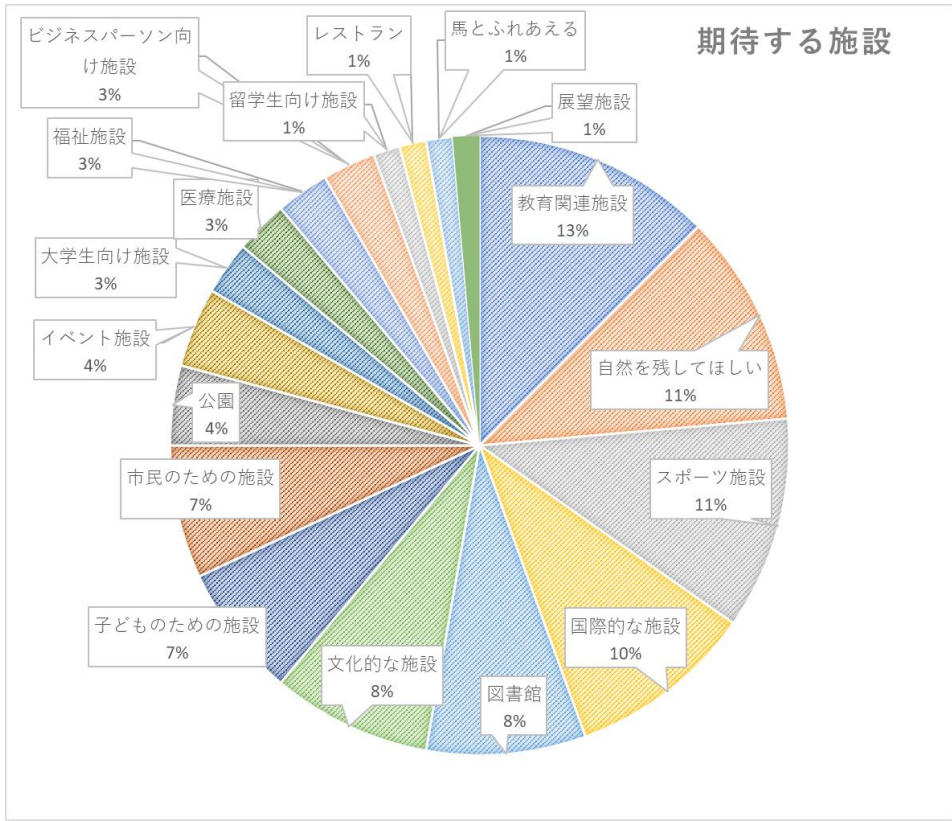
市民 間谷住宅)

- ・自然の中での幼稚園、保育園、介護施設、住民の憩いの場(記載なし)
- ・何をするにしてもお金が必要です。どうやって資金調達するかを考えるべきです。お金さえ準備すれば、行政は動きます(箕面市民)
- ・市民(若い世代も半分以上入れる)の構想委員会をつくって、専門家とともに案を作る。行政はその提案を聞く(箕面市民 間谷住宅)
- ・大阪外大の痕跡を残してほしい(箕面市民 間谷住宅)
- ・キャンパス跡地でなく、キャンパス・建物そのものを残して有効利用してほしい。なんでも潰して新しいものがないわけではない。ヨーロッパのように古い街を再生することのように(卒業生/元教職員)
- ・卒業生や地域の方も気軽に訪れることのできる場になればよいと思います。(外国語学部卒業生)
- ・学研都市のミニ版みたいな拠点にしてほしい。また、いろいろなショッピングセンターのような場所にはしてほしくない。(記載なし)
- ・領事館の話はよかった。50以上の国が集まるような場所になれば新しいものが生まれるような。各教室を各国の事務所に格安で募集すれば。(記載なし)
- ・跡地に施設等ができた場合、交通ルートは住宅内を通らないようにしてほしい。緑は残してほしい(記載なし)

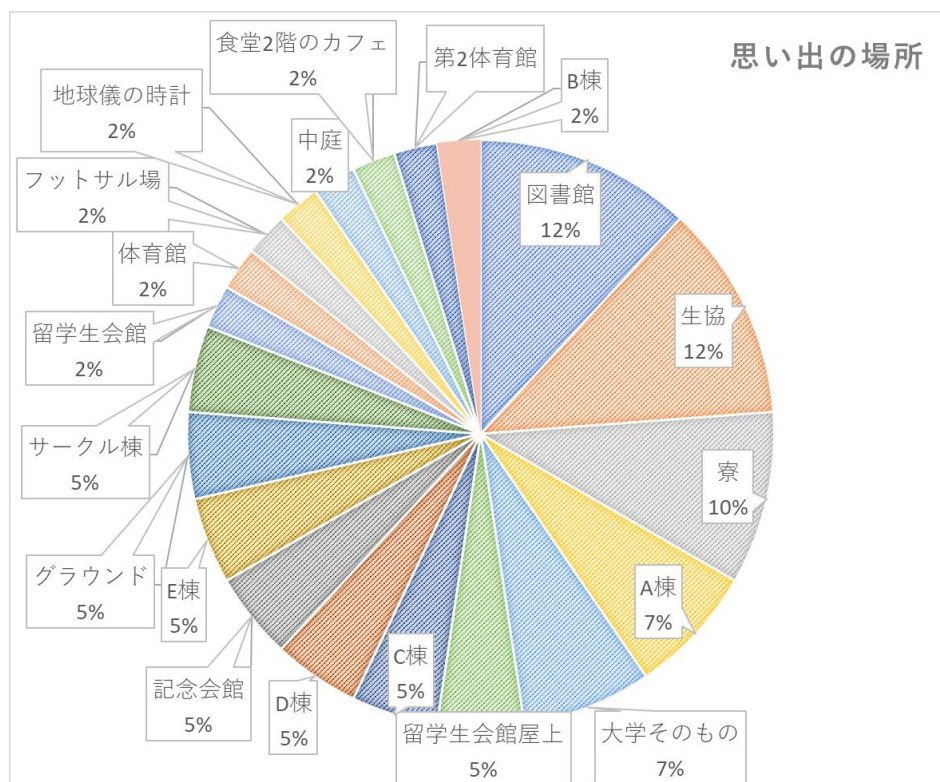
【回答者の所属】



【移転後の跡地に期待する施設】



【思い出の場所】



各イベント参加人数

第1弾 箕面で花開く国際交流の実践の輪とこれからの課題：15名

第2弾 野外体験馬車イベント：約400名

第3弾 阪大箕面キャンパスと世界を繋ぐ：会場15名、オンライン10名

第4弾 世界に発信！箕面産実生ゆずの魅力：約60名

第5弾 日本から見る中国 中国から見る日本～等身大の目線で考える～：約80名

第6弾 間谷キャンパス40年～思い出を語り、未来を語る～：約30名

総動員数：610名

個人インタビュー

インタビュアー：田中將太（大阪大学外国語学部中国語専攻）

インタビュー対象：稲野一三さん(箕面市小野原在住)

日時：2018年11月14日

時間：15:30～16:30

場所：箕面市立多文化交流センター

<外大との関わり>

- ・伊地智善継さん（稲野さんの奥さんの叔父）が外大移転時の学長で縁を感じている。21年キャンパス移転にも深い興味があり注視している。
- ・平成17年の国勢調査では、調査員として小野原の外大留学生たちと話すことがあった。
- ・親しい外大出身の共産党議員がいて、熱い議論を交わしたことがある。

<箕面市について>

- ・人口3万人→大開発で13万人に。地価上昇。
- ・彩都西の平均年齢は27.8歳。
- ・豊川は外国人居住率5%と高く、国際結婚も多い。→国際的なまちづくりに繋がる→MAFGAや国際学院など。
- ・小野原交差点からスイミングスクールまでの道は昔からあった。マルヤス側からキューズモールまでの道は後からできた道。
- ・キューズモール周辺は柑橘系の畑があった。この辺りは柚子に合う土地で、10年前からゆずのキャラでPRをスタート。

<箕面キャンパスについて>

- ・静かな住宅街の中にある。
- ・ここ5年で新設の認定保育園が増えた（8つ）。
- ・小野原に外大を建てたかったが、地価が高い為仕方がなく栗生間谷に建てることになった。

<幼少期の思い出>

- ・勝尾寺川には、現在の栗生団地周辺に水車が4つ点在していた。
- ・田んぼが多かった。
- ・小学校の同級生たちで岩坂（最も北側に位置、現在ではユニバーサル園芸がある）でミヤマクワガタをとった。
- ・勝尾寺に続く道で残雪遊び（小野原では雪が見られなかった）。
- ・外大周辺は雑木林ばかりで、そこでもクワガタ捕りをしていた。

このプロジェクトに参加して

大阪大学言語文化研究科
准教授 今岡良子



このプロジェクトに参加し、改めて知ることになったのは、この箕面キャンパスを愛しているのは、ここで学ぶ学生、院生、留学生、卒業生と、ここで働く教職員、退職者だけではなくということである。馬車を走らせるイベントのポスターの掲示、チラシの配布を周辺のお店や自治会が快く受け入れられたのは、「この後、一体どうなるのだろうか」という問う相手のいない心配が、キャンパスの外の住民の心の中にあっただからだ。愛されてきたことを知る。なんと素晴らしいことか。そして、ようやくキャンパス内の構成員によるコミュニティとキャンパス周辺住民のコミュニティが、顔と顔を合わせ、言葉を交わすことになったのだ。

私は、国連生物多様性の会議に参加し、Multi Stakeholder Process (MSP) を経験した。1992年のリオでの地球サミット以来、関係者が対等な立場で情報交換し、対話による合意形成をはかるために、その手法が模索されてきた。いまでは、日本の内閣府も、この方法を奨励しているが、まだ認知度も低い。ドイツでは、例えば、再生可能エネルギーの発電所建設には、MSP が使われたという。様々な利害関係者が会議に参加し、心配なことを思う存分言葉にする。それを一つずつ、解決していく。問題がなくなり、合意形成された後は、反対する声も上がらず、事業はどんどん進んでいくと聞く。

箕面キャンパスの内と外のコミュニティ。それは、Stakeholder の中で中心に置かれるべき利害関係者である。にも関わらず、現在においても、合意形成の外に置かれ、情報を得る窓口も持たない。

箕面の東端に移転して以来、大阪外大から教員や学生はそれぞれの専攻語を活かし、地球の隅々に出かけ、その地の人々と交流し、知を発信し、様々な国と地域から留学生がやってきて、ここに住み、第二の故郷となった。このイベントに参加する度、もっと早く、最も身近な周辺住民とのコミュニケーションを取ればよかった。とても切ない思いが残る。きっと、そう思ってくださった住民も少なくないだろう。

MSP が当たり前前の社会になるよう不断の努力をすること、身近なコミュニティとのコミュニケーションを心がけること、今後、それがどこかで実現したなら、切なさや寂しさをきっと忘れていくことだろう。

18才から58才の現在まで、もう40年、人生の3分の2を過ごしたこのキャンパスが、周辺住民の40年の人生の中に存在し、愛されてきた。それを知ることができた。それを住民と確認することができた。それをここに文字にして書き留めることができた。それが、成果である。

箕面発植物の活用～ユズを一例に～

大阪大学総合学術博物館
特任講師 伊藤謙



統合医療には西洋医学以外にも様々なものがあるが、薬物を摂取するだけが医療ではなく、例えば鍼灸や指圧といった物理的なものもあり、それ以外には匂いにより様々な効果を期待するアロマセラピーのようなものも含まれる。

筆者は、京都大学薬学研究科の博士課程時代に生薬由来成分のアロマセラピーの効果についての研究を実践してきた。当時の日本では、アロマセラピーは、いわばファッションのような感覚で行われているものであり、学術的な世界とはかなり遠い存在であった。

すなわち、医療として用いるために最も重要な科学的根拠 (Scientific Evidence, エビデンス) と言うものは非常に乏しいのが最も大きな問題だったのである。これはアロマセラピーの世界で喧伝されている様々な効能と言うものが裏付けのないままに使われていることが多いと言うことを暗喩している。

筆者はその現状を少しでも打破すべく、薬理学的手法によって生薬成分由来の物質によって、アロマセラピー効果は実際にあるのか、そしてあるならばどのように起こるか、について検討してきた。

アロマセラピー研究については他にも困難な点が多くあったため、京都大学を卒業後、大阪大学研究支援推進員、京都薬科大学助教を経て現在に至る私の研究生活の中で、なかなか改めて取り組めない状況が続いていた。

しかし現在では状況が変わりつつある。すなわち昨今では、自然由来成分の使用が非常にもてはやされ、アロマセラピーについても科学的な根拠が揃いつつあり、新たなステージに向けた研究ができる時代になりつつあると感じている。

今回の箕面のプロジェクトにおいては、柑橘類“ユズ (柚子、学名: *Citrus junos*)” の可能性について、以上を踏まえ薬学的見地からの話をさせていただいた。

箕面地域は古くからのユズの産地であり、樹齢 100 年を超える古木が多数存在している。これらユズの古木は種子から芽生えた『実生ユズ』であり、現在の一般的な接ぎ木苗のものとは異なるものである。

箕面の実生ユズ果実から抽出した精油のアロマセラピー効果は、一般に流通している接ぎ木苗のユズ果実から抽出したものに比べて高いことが経験的に知られているが、科学的根拠は示されていない。

ユズには様々な芳香性成分が含まれているが、その中にはリモネン (特に、D-Limonene) といった私がかつて鎮静活性を有することを発見した化合物も存在する。

もちろん、これだけで全てのユズの効果を証明するとは言えないものであるが、ユズにも似たような作用がある可能性は否定できない。今後の検討課題としては有望であろう。

このように、ある一定の科学的根拠を有しながら、地元産する有用植物に付加価値をつけて活用することは、非常に意義あるものと考えている。今回の講演会でも、そのような将来の可能性についての市民からの質問が相次いだ。

加えて、箕面キャンパスの中には様々な植物が生息しており、その中には漢方薬や民間薬などで使用される植物も見受けられる。

大阪大学では、“植物探検隊”という、豊中キャンパスにある里山・待兼山にて、植物を探索するイベントを実施している。このような類のイベントに加え、地域に自生する薬用植物に注目した探索も、ある種のエコツーリズムとなる可能性が考えられよう。

大阪外国語大学・大阪大学箕面キャンパスへの思い

大阪大学大学院法学研究科
教授 福井康太



最初にお断りしておくのと、私は大阪外国語大学（以下「外大」という。）の出身ではないし、外大・大阪大学（以下「阪大」という。）箕面キャンパスに勤務していたこともないので、このキャンパスについて語るのはやや不自然なのだが、私の妻は外大ベトナム語科の出身で、また義理の姉も外大英語科の出身ということもあり、このキャンパスに馴染みを感じてきた。私が阪大に赴任してきて16年が過ぎたが、その短い間にもキャンパスの周囲の環境は大きく変わった。そこで、私の知る範囲で外大・阪大箕面キャンパスとその周囲環境の変貌について語っておきたい。

私が箕面キャンパスに関りをもつようになったのは、外大・阪大統合前のことで、深尾葉子先生と研究会で知り合ってからである。2004年ぐらいからだと思う。その後は外大・阪大箕面キャンパスを頻りに訪問するようになった。2004年当時、キャンパスの裏山は雑木林で、広葉樹と竹が生い茂っており、周りにはまだ緑がかなり残っていた。ところが、外大統合後、モノレールが彩都西まで延長されたころから、外大・阪大箕面キャンパス周辺の宅地開発が急速に進んだ。妻は1980年代後半当時外大アーチェリー部にいたのだが、当時は裏山に向けてアーチェリーの矢を放つても何ら問題はなかったのが、いまやアーチェリー練習場のすぐ裏が住宅になり、大変に危険な状態となっている。このような変化があったのはここ十数年である。短期間に箕面キャンパス周辺の風景があつという間に様変わりしたのは、交通の便がよくなったこともあるが、おそらく将来的にこのキャンパスは移転し、その土地が開発対象になると見越して不動産投資が集中したことにある。

外大・阪大箕面キャンパスがあつたからこそ、それなりに緑地が残り、彩都・間谷地区も「よい雰囲気」の土地だと評価されていたのだろうと思う。だからこそこの地域が生きいきとしていた。本来なら、このキャンパスを残し、守っていくことが地域の雰囲気を守り、集いの場を保ち、この地の価値を保っていくことになるはずである。しかしながら、開発業者はそのようなイメージを利用しつつも、実際には徹底した宅地開発を行おうと考えているのであろう。その企図と大阪大学の意向とが合致し、キャンパス移転はあつという間に決まってしまった。

この決定プロセスについては私も詳細を知るわけではないので語ることはできない。けれども、外大・阪大箕面キャンパスが単なる開発地になってしまった場合に、彩都・間谷地区がこれまでと同じような「よい雰囲気」を保つことができるかどうかは、甚だ疑問である。彩都・間谷地区が「よい雰囲気」を保っていくためには、外大・阪大箕面キャンパス跡地が、緑を残し、また地域に愛され、世界から人が集まるような場所であり続けることが必要不可欠なのではないか。この点は譲れない一点だと思う。

箕面市が、地域の価値の中心となる存在としての外大・阪大箕面キャンパスというような側面をきちんと評価しているとは思われない。このまま開発が進められることになれば、地域の価値が大きく損なわれることになるのではないかと。私の危惧はその点にある。

外大・阪大箕面キャンパスの跡地の開発が、緑を残し、また地域に愛され、世界から人が集まるような場所としての意味を失わないような方向で進められることを切に願っている。

大阪大学間谷キャンパス（旧大阪外国語大学）跡地利用の考え方

流通科学大学
教授 上田義朗



1. はじめに

「阪大跡地に先生の勤務先の大学は移転しませんか。大学の後には大学が一番です」。箕面市内の有識者にこのように問われたことが、大阪大学跡地利用の問題に私が関わる最初の契機となった。もう数年前のことである。「箕面市に半世紀も住んでいるのだから、何かお役に立てることがあれば」という動機が今日まで続いている。

本稿の目的は、新しい街作りのための構想またはコンセプトをいくつか紹介することである。それぞれが箕面市にとって魅力的と私は思っているが、それらが全部ではないし、また唯一を選択すべきものでもない。ひとりで演じる「ブレインストーミング」のような内容である。市民また読者の皆さんも、自由に跡地利用の夢や希望を描いてみてください。そういった意見の交換が十分に熟成してから、専門家や実務者による事業化の本格的な検討に入ることが理想のように思う。なぜなら、それが民主主義的な手続きのあるべき姿であるし、市民自身が考える時間的な余裕ができるからである。

なお、最初に少しばかり堅い議論になるが、跡地利用の基本的な枠組みを検討する。すなわち公共事業と民間事業の中間に位置する PPP/PFI 事業の箕面市の現状と課題について私見を述べる。

2. 箕面市における PPP/PFI 事業の現状と課題

すでに工事中の大阪大学移転先の開発については、国土交通省のウェブサイトに公開されている^[1]。【箕面市（大阪府）】まちづくり（大阪大学箕面キャンパス移転プロジェクト）として、内閣府や国土交通省が先導する PPP（官民連携）/PFI（民間資本主導）事業（平成 27・28 年度）の事例に含まれている。この内容は、国土交通省担当課が「地域協議会」の設立を箕面市と協議することから始まり、箕面市役所内の関連部局が「PPP/PFI に関する基礎知識の共有、PPP/PFI 事業の推進及び地域協議会形成に関する課題等」を把握し、最後に「本事業の検討プロセスで得た知識・経験を庁内でも共有・継承しつつ、今後、庁内において地域協議会自走体制の整備を検討」することが今後の展望となっている。

すでに日本では、PFI 法（民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律）が施行（1999 年 7 月公布、2011 年 6 月改正 PFI 法公布）されており、公共事業が民間事業に移行する潮流が存在している。これは、本来は政府の仕事である公共事業を、政府の財政赤字を削減するという大義名分によって、その資金調達を民間企業に委ねることを意味している。そのため当然、営利目的の民間企業に対して利益獲得の機会を政府が事前に用意することになる。

このような政府主導の PPP/PFI 事業に箕面市が関与したからには、その枠組みから脱却することは容易でないと思われる。さらに納税者としての市民の素朴な感情として、税金を使った公共事業よりも、それを民間企業に任せた事業の方が損得を実感しない。また「民間活力」の導入は良いことだという無批判の先入観もある。その結果、市民も PPP/PFI 事業に強行に反対しな

い状況が生まれている。

箕面市における PPP/PFI 事業は着実に進展している。「西南公民館」が「西南生涯学習センター」に代わり、公共の公園や市有地の管理が民間団体に委託されている。さらに税金の公平な用途のために「受益者負担」という考えは広く浸透している。これらは税金の節約になり、市民や民間団体の活動の活性化にもなる。公的事業に参画する市民は、社会奉仕に従事しているという満足感が生まれるかもしれない。まさに PPP/PFI 事業は「良いこと尽くめ」である。

図1は、「通常の公共事業」と「通常の民間事業」の間に位置する「PPP/PFI事業」の枠組みを示している。その中でたとえば BOT とは、民間企業が B=Build(建設)し、O=Operate(管理・運営)し、その後に政府また地方公共団体(=官)に T=Transfer(移転)のすることを意味する。またコンセッションとは「公共施設等運営権」のことであり、所有権は官に残し、運営を民に委託する。また、新たに「建設」するのではなく、既存の建物を「改修」して「管理・運営」することもありうる。

PPP(Public Private Partnership)とは

○ 行政と民間が連携して、それぞれお互いの強みを生かすことによって、最適な公共サービスの提供を実現し、地域の価値や住民満足度の最大化を図るもの。

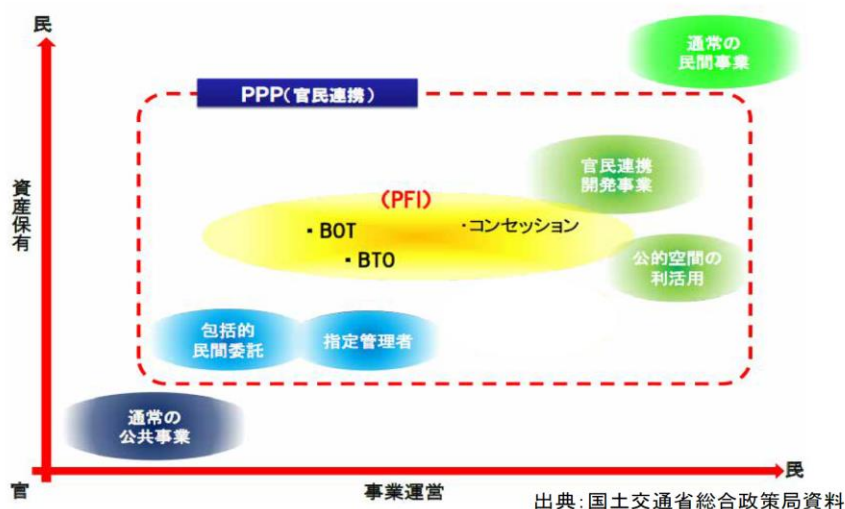


図1 PPP/PFI事業の位置づけ

引用：内閣府民間資金等活用事業推進室(PFI推進室)『PPP/PFIの推進について』平成29年10月2日、平成29年度公共サービスイノベーションPF in 高松。

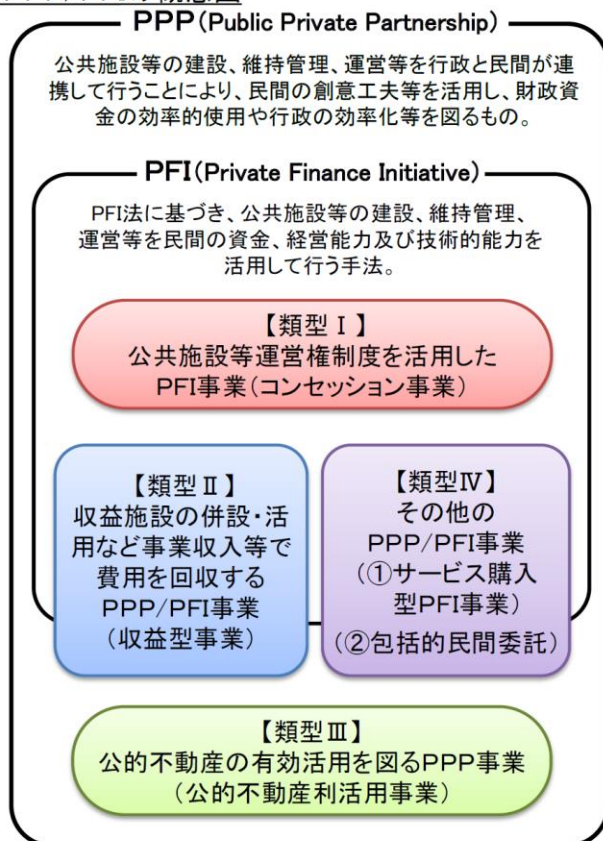
ここでPPP/PFI事業の失敗事例を検討し、それを教訓としなければならない。容易に想像できることだが、営利目的の民間企業は、PPP/PFI事業が赤字となれば、最終的に事業撤退する。その過程では「コスト削減」の努力が続けられ、その中で人件費削減やサービス軽視も含まれるだろう。それらが市民の不便・不利益になることは間違いない。さらに公共事業よりも市民の受益者負担の金額が大きくなる場合もあるが、それを特に検証しなければ、自らの負担増加=不利益に市民が気づく機会は生まれない。

市民の不利益が顕在化すれば、PPP/PFI 事業から公共事業に回帰して当然である。納税者に対するサービスの提供と向上が地方公共団体（＝官）の本来の役割だからである。こうした「遠回り」をするなら、最初から公共事業にすればよい。したがって最初に、公共事業か PPP/PFI 事業かという判断について広く十分な議論が求められる。

以上、すべての PPP/PFI 事業が市民にとって利益になるわけではない。市民が期待する税金の公平・効率的な使途のためには、公共事業について市民や市議会が今まで以上に監視・精査すればよい。PPP/PFI 事業が「税金の公平・効率的な使途」を無条件に保証するわけではない。利益追求を目的とする民間企業は自社の資金使途の節約と効率性を追求することが本質である。企業の「社会的責任」や「社会貢献」が強調される時代であるが、それが企業利益に優先されることはありえない。

さらに、PPP/PFI 事業が官民癒着の温床となり、その結果、市民が軽視・無視・排除される懸念がある。つまり多様な意見を持つ市民を事業に参画させるよりも、専門の民間企業に任せる方が事業の進捗が早くなるという官民の事情がある。民間企業にとって「時はカネなり」「時間はコスト」である。PPP/PFI 事業は、住民自治や住民参加という民主主義の基本原則よりも、地方公共団体（＝官）と民間企業の都合を優先させるという問題点があるように思われる。

PPP/PFIの概念図



各類型のスキーム図 (※以下は、各類型の一例)

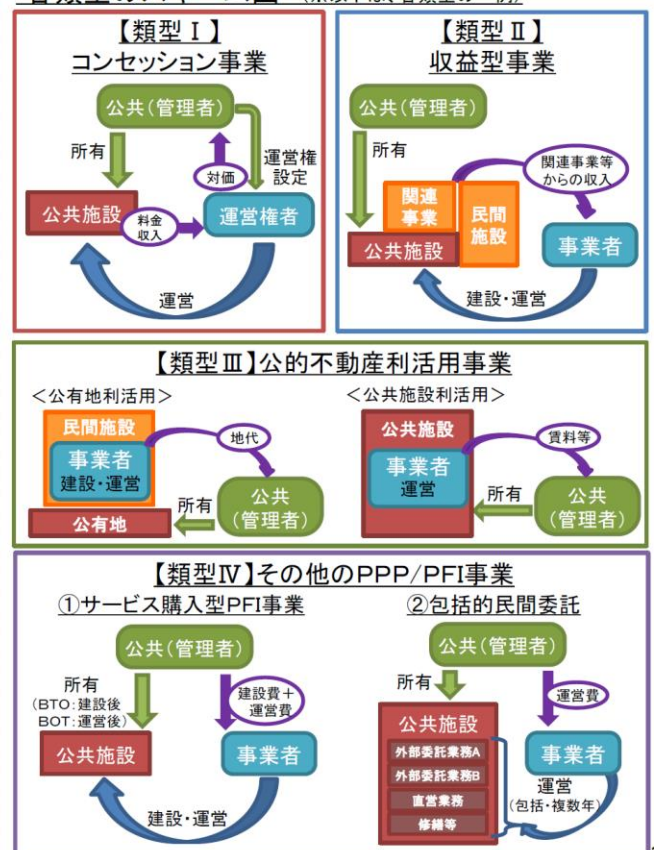


図2 PPP/PFI の概念図：事業の種類

引用：図1と同じ。

図2が示すように、箕面市の大阪大学跡地利用については、【類型Ⅲ】公的不動産の有効活用を

図る PPP 事業に該当する。箕面市は所有権を継続しながら、民間事業者から「地代」または「賃料」等を受け取る。また事業者選定の基準は次の 3 点である。①地域の多くの民間事業者に既に民間提案を含めたノウハウがあり、複数参加が見込まれる。②民間事業者の提案を求めるための明示的なインセンティブ付与が必要。③ノウハウ重視で事業者選定を行い、協議しながら自治体の意向を反映する必要がある。これらの基準に応じて次の 4 つの業者の選定方式に区分される^{〔2〕}。a.マーケットサウンディング型、b.提案インセンティブ付与型（加点なし）、b.提案インセンティブ付与型（加点あり）、c.選抜・交渉型。こうした事業者選定の手順を許容するとしても、最大の課題は市民の要望や希望を最大限に反映することである。

箕面市は大阪大学跡地を 100 億円近い金額で買収している。買収額よりも箕面市が高額で売却し、その差益を得ることも考えられるが、それは住民サービスの提供とは言いがたい。さらに「土地転がし」という批判もありうるだろう。そこで公共事業とするか、PPP/PFI 事業とするか、または所有地を区分して、その両方で事業化する選択肢がありうる。いずれにせよ、国土交通省や内閣府が PPP/PFI 事業の事例や方法を情報収集しており、各省庁との協議が求められる。

そして何よりも、箕面市の独自の判断として、周辺住民や市民の要望や意向の吸収と反映が最優先にされるべきである。国土交通省は図 1 のように「住民満足度の最大化」が目的と記載されている。それでは、それを保証するための指標・尺度・方法は何か。市当局が説明責任を十分に果たし、それに基づく市民や市議会の「熟議」を通じた住民の納得感が、住民の満足度の最大化につながるのではないか。

3. 大阪大学跡地利用について提案

—世界とアジア諸国のモデルとなる生涯活躍の「学校村：Village of Schools」創造—

【キーワード】

- ①教育・・・大阪外国語大学・大阪大学外国語学部の歴史と卒業生の思いを継承
- ②外国人・・・日本の労働人口減少に対応するには外国人材は不可欠
- ③医療・介護・・・高齢化社会の先進国である日本の現状に対応
- ④健康・スポーツ・・・青少年の育成と成人の健康維持に寄与
- ⑤共生・・・高齢者・外国人・青年の起業やビジネスの交流促進
- ⑥大阪大学・・・移転先の図書館共用のみならず、大学の知的情報発信拠点としての機能を活用

最初に述べたように下記の提案は、複数の単発的な私見を列挙・提起したにすぎない。体系化した提案は、さらなる議論が必要である。

① 「CCRC 構想」を進化・適合させた日本初の本格的なシニア都市の具現化

CCRC (Continuing Care Retirement Community)^{〔3〕}とは「継続的なケア付きの高齢者たちの共同体」。仕事をリタイアした人が第二の人生を健康的に楽しむ街として米国から生まれた概念。元気なうちに地方に移住し、必要な時に医療と介護のケアを受けて住み続けることができる場所を指す。

ただし、大学跡地の起伏のある地形は、介護対象者の車椅子の移動には不適當という意見がある。したがって大規模な介護福祉施設の建設には懸念がある。

② 「職業訓練学校ビレッジ」(＝「学校村」)の創設

主に外国人学生向けの介護福祉専門学校・調理専門学校・日本語学校など、さらに日本人向けの外国語専門学校等を誘致する。これらは退職者・高齢者の再学習の機会を提供することにもなる。「生涯学習」の重点を従来の「教養講座」のみならず「専門技術・ビジネス講座」にも配慮する。完全な退職ではなく、その経験を生かした仕事を継続できる周辺環境を整備する。これが「生涯活躍」の出発点になることが期待される。さらに既存の大学校舎を改修・活用できるので建設コストの低減になる。

③ 外国人留学生・外国人技能実習生と退職者世代のコラボレーションの空間創造

上記の②を補足して、外国人に対する教育・指導・技術移転・文化紹介・協働・共同起業・ボランティア活動の機会を高齢者向けに提供する。これらを大阪大学や職業訓練学校と連携して促進する。さらに外国人が住みやすい環境整備に配慮する。日本人と外国人が相互に共生できる環境が求められる。

④ 生涯に渡る学習・スポーツ・起業・ビジネスが可能な「長寿健康のまち」の創造

特に「生涯スポーツ」の推進は、すべての国籍や世代の人々にとって健康年齢の向上のために不可欠とみなされる^{〔4〕}。長寿健康のためには、身体的・精神的な充実感が不可欠であり、その双方を提供する。

⑤ 大阪大学医学部付属病院と連携した外国人富裕層向けの宿泊施設の建設

特にアジアの外国人富裕層の診断と治療と家族向けの長期滞在が可能な「5ツ星ホテル」の誘致。これは、地元住民にとっても利用できる施設になりうる

⑥ 高齢者に向けた「生涯活躍」という新しい住環境モデルを提供

日本人の高齢者世帯の転居については、「都心の高層マンションに移住」と「田舎の旧家に移住」という極端な「終活」の現状がある。それに代わる都市近郊の箕面市に「生涯活躍」の居住地を提供する。

⑦ 近隣の農家と連携した有機野菜の栽培と消費

すでに進行中であると思われるが、箕面市内および特に間谷地区の農家の協力に基づいて「地産地消」の実現を目指す。より積極的な箕面市特産物の販路拡大の支援が期待される。

⑧ 箕面市内で「住環境サイクル」が完結する

通常の住宅転居のサイクルは次のようになると思われる。①新婚時代の2人暮らし⇒②子育てのための戸建て住宅・二世帯同居・二世帯近接・広面積の賃貸住宅⇒③住宅リフォーム・賃貸住宅転居⇒④介護付きアパートなど⇒④介護福祉施設。これらの住環境のすべてを箕面市内に用意し、住民の移動を箕面市内に完結させる。

4. 結びにかえて

上記のような跡地利用の提案は、最初に述べたように私の思いつきの領域を出ない。商業施設の建設もありうるが、大規模な開発は周辺の住居地域に交通渋滞などの悪影響を与えるであろう。このようにPPP/PFI事業となれば、公共性と収益性の両立が容易ならざる課題である。

大学の誘致が困難であるとするれば、複数の各種の職業訓練校つまり専門学校の誘致に可能性があると私には思われた。日本の労働人口の減少は必至であるから、日本経済の維持と成長のためには外国人材の雇用が不可欠とみなされる。そのための専門学校・日本語学校の「集積」は、既存の校舎を活用できるという意味からも大学誘致に代わりうるものである。

また定年退職者の新たな職業支援に役立つと考えられる。たとえば会社を早期退職して調理専門学校を修了。その後に居酒屋を開業して、第二の人生を歩むというようなこともありうるだろう。その「学校村」で知り合った外国人留学生と一緒に海外店舗の開業も視野に入る。このようなシナリオを想起した提案である。また公共性を考えると既存の運動場を活用したスポーツ健康施設の建設は、長寿健康のために不可欠であり、それは優先して検討されてよい。

いずれにせよ、広く市民や関係者が自由に跡地利用を考える時間が必要と思う。この意味で、このような報告書の出版・公開は、今までの箕面市の不動産開発プロジェクトでは前例のない有意義な企画であると思われる。学外者であるにもかかわらず、本プロジェクトへの私の参加に快諾を賜った深尾葉子先生と研究室の皆さんに感謝を申し上げたい。

【注】

〔1〕【箕面市（大阪府）】まちづくり（大阪大学箕面キャンパス移転プロジェクト）【平成 27・28 年度】について、参照 <http://www.mlit.go.jp/common/001180903.pdf>

〔2〕国土交通省総合政策局官民連携政策課『PPP/PFT の推進について』平成 28 年 8 月。

<https://www.mlit.go.jp/common/001147420.pdf>

〔3〕CCRC について詳しくは以下を参照。

①日本版 CCRC 構想有識者会議『日本版 CCRC 構想』、2015 年。

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/ccrc/ccrc_soan.pdf

②日本政策投資銀行『日本版 CCRC から「生涯活躍のまち」へ』、2017 年。

https://www.dbj.jp/ja/topics/region/industry/files/0000028082_file2.pdf

〔4〕「ワールド・マスターズ・ゲーム関西」（ミズノ協賛）開催の理念を継承する考え方である。参照 <http://www.wmg2021.jp/> 「健康長寿」を想起するなら「ワールド・マスターズ・タウン」という呼称もありうる。ただし外国人青年が、「シニアタウン」を含む日本人高齢者を意識した名称に魅力を感じるかどうか議論されてよい課題である。

フィールドの基点・箕面キャンパス

元大阪大学人間科学科准教授
神前進一



旧大阪外大へ赴任した1988年から阪大統合後の2015年に定年退職するまで27年間の箕面キャンパスでの教育・研究を振り返ると、粟生間谷という環境と多くの意欲的な教員・学生との出会いがあった。共通教育の人文地理学担当教員として着任した年から意欲的な学生たちと出会い、さまざまな活動が始まった。関連科目として地理学野外実習を土曜午前中に開講し、粟生間谷という立地環境を生かし、受講生は里山の土地利用変化から路傍の石仏までさまざまなテーマでミニフィールドワークを経験した。私の研究室に深尾ゼミの学生など環境問題に関心のある学生が集まり最初の環境サークルが立ち上がり、キャンパスエコロジー活動だけでなく、止々呂美地区で休耕田を開墾しての野菜の有機栽培も始まった。専攻を問わず多くの学生、さらに近隣住民も参加した畑作業は20年以上続き、毎週水曜日午後のB棟前での100円野菜スタンド無人販売は多くの学生・教職員に有機野菜の味を知ってもらうことになった。この経験をもとに有機農業で生計を立てる卒業生が数名誕生した。

1992年のリオサミットを前に、深尾、松野、津田、高山先生らと共に「地球環境論」、「地球開発論」という総合科目を立ち上げた。毎回国内外からの著名な学者や市民活動家を講師としてお呼びする豪華リレー講義はD棟大講義室が満員になる看板講義となり、諸先生の人脈で出講いただいた方々との出会いがあり、現在も箕面で活動をしている「菜の花プロジェクトみのお」の契機となった藤井絢子さんもその一人だった。この授業が発展し改組に伴い1993年から国際文化学科開発・環境専攻がスタートした。

開発・環境専攻は、外大にある25の言語専攻とのダブルメジャーを強みとし、世界各地の草の根で活躍する多くの人材を輩出することになるが、原点はフィールドワーク科目を必修にしたことにあった。神前ゼミの場合1年間をかけて野外調査の計画づくりから3回のべ10日近いフィールドワークを経て報告書作成までを経験したことは卒業後も最大の財産になっていると多くの旧ゼミ生から聞く。10年間通い続けた徳島県上勝町では地域づくりの活動にゼミ生と参加し、海外でフィールドワークをする際の原点の多くを学んだ。Think globally, act locally.をモットーに英語の教科書使い、有機農業や森林についての専門科目では畑での野菜作りや森林ボランティア活動への参加を促した。

また有志を募って毎年のようにボルネオ島の先住民の村へのスタディツアーにもものべ50人ほどが参加し、それをもとに海外で卒論作成に取り組んだ学生も多数に上った。こうした国内外でのフィールドワークの出発点になった場が箕面キャンパスであった。

健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクトによせて

有限会社 re・make 代表取締役
日本統合医療学会（IMJ）正会員
岡山栄子



<http://yuragi.co.jp/>

弊社は、箕面市牧落に本店をおき、「止々呂美地区で生産される実生ゆず」の規格外や搾汁後の廃棄される果実を原料として、化粧品・健康食品・生活用品の、企画・製造・販売をおこなっております。また、葛飾北斎がゆず酒で中風（脳血管障害の後遺症）を癒したように、「日本の風土と日本人の気質にあったケアや養生」を大切にした未病ケアスクールを運営し、ケアを通じて社会に貢献できる人材の育成にも力を入れております。

今までも、大阪大学をはじめ北摂地に所在する教育機関や日本統合医療学会（IMJ）の研究会、箕面商工会議所のイベントや弊社企画のワークショップなどで、実生ゆずの魅力とその可能性について話をしてきました。

そして今回、『健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト』の第4弾イベント「世界に発信、箕面産実生ゆずの魅力」にて、京都大学の北島宣先生や大阪大学の伊藤謙先生と一緒に講演する機会をいただきました。先生方の講演を拝聴し、聴講者のみなさまと対話することで、実生ゆずの産地である止々呂美地区とその周辺地区の現状を再認し、新たな気づきを得るに至りました。

「実生ゆず」とは、全国でおおよそ5,000本しか存在しない、学術的にも産業的にもきわめて希少な樹木で、箕面市止々呂美地区は、大阪府で唯一の「実生ゆず」の生産地です。18年もの時をかけ種から育てる実生栽培のゆずは、一般に流通している接木栽培のゆずと比べ、香り高く大粒です。大地に深く根を張り、自然の力を蓄え、自らの力でたくましく成長することからついた花言葉は『健康美』。果実はクエン酸が豊富で、食すれば疲労回復や体力増進・食中毒の予防に役立つといわれています。その香りにはリフレッシュ効果やリラックス効果が認められ、血管を広げて血流の改善に有効であることもわかってきています。

ゆず風呂やゆず味噌など、古来より日本人の生活や食文化に深い関りがある実生ゆずですが、今後の研究で、より効果的な活用法が検証できれば、「止々呂美の実生ゆず」が、北摂地域のみなさまのQOL（生活の質）の向上と健康寿命延伸の一助となり得ると確信します。そのためには実生ゆずの安定供給が必要ですが、里山の保全と整備、ゆず農家の労働環境の改善と新たな担い手の確保など解決すべき課題もあります。また、新たな活用法の提案や新商品の開発を行い、需要を広げることも重要です。実生ゆずの可能性とその未来に向けて持続可能なシステムの構築が急がれます。

北摂地区の「健康長寿」は、「箕面特産の実生ゆず」から。人にも自然にもやさしく誰もが安心して暮らせる健康長寿のまち北摂地区の未来図を、ここに暮らすみなさまと産・学・官が一緒になって、知恵を出し合い協力して描いて行きましょう。高高齢化の時代を健康に生き抜くために！

大阪大学箕面キャンパス発 「ソーシャルイノベーションプロジェクト」に参加して



箕面市立多文化交流センター 館長
岩城あすか

2018年10月20日、このプロジェクトの第1回目の企画で講演させていただいた。母校である大阪外国語大学が阪大と統合したときも驚いたが、2021年4月に新駅のできる箕面市船場地区への移転が決まったときは、もっと驚いた。私は間谷住宅の住民でもあるので、箕面キャンパスの移転について、大学関係者と地元住民が顔を合わせ、ともに考える機会をつくっていただいたこのプロジェクトに、とても感謝している。

2回目の企画（馬車イベント）の際は、職場（箕面市立多文化交流センター）でやっているコミュニティ・カフェ（comm cafe）のシェフたちも屋台出店した。ゆったり、のんびりとした空間で、家族連れのお客さんも多く、とても良い雰囲気の中でベトナムやモンゴルの家庭料理を楽しんでもらえたことも良かった。

振り返ると、今の自分を形成しているのは、すべてこの箕面キャンパスに通っている頃に出会った人たちとの出会いが大きく影響している。1993年、入学してすぐに学習し始めたトルコ語。トルコ人の先生たちは、就職氷河期で思ったような就職先を得られなかった私に、トルコの大学院への留学を強く勧めてくれた。（結果、イスタンブール大学の修士課程に留学することになり、4年の滞在期間中に日本のマスコミの通訳をしたり、1999年におきたトルコ北西部地震では、日本の市民団体が集めた7000万円の義捐金をもとに始まった復興プロジェクトに通訳ボランティアとしてかかわった。トルコ人の中でもマイノリティである伴侶も得たことで、より深くトルコという国を知ることができた。）

また、サークル「在日韓国・朝鮮人問題研究部（のちに在日外国人との共生を考える会に改称）」に入ったことがきっかけで、高槻市の在日コリアンの中学生たちや大阪市内のベトナム難民の高校生の学習支援に携わったりもした（こちらは現在の職場＝箕面市立多文化交流センターで、外国にルーツのある子どもの学習支援や居場所づくりの事業を実施するうえでの貴重な原体験となっている）。さらには、家族以外の他人による24時間体制の介護のもと、自立生活をおくる金満里さん（重度の身体障害者だけで構成される劇団「態変」主宰者）の介護ボランティアも務めることになり、現在に至るまで、「健常者社会とは、優生思想とは何か」を考えさせられてきた。

どんな世界の、どんな地域にもマジョリティとマイノリティの関係性は存在し、状況によって複数のマイノリティ性が交差し、刻々とその力の大きさも変化する。社会の生きづらさがどんどん増す日々だが、これからもこのプロジェクトの精神が途絶えぬよう、小さな声や動きを敏感に感じとりながら、すべての人がありのままに、その存在を大切にされるように、目に見えていることの裏側にある奥行や深さを大切にしていきたい。

市議、そして、外大にご縁をいただいた家族として

箕面市議会議員
村川まみ



子どもの頃、それもととても小さい頃に、大阪外大が上本町からどこへ移転するかの議論を母と祖父がしていたのをよく聞いた記憶があります。祖父は、自身も外大卒業で中国語の教授をしていました。箕面への移転に関しては、「やっぱり豊中がよかったんじゃないの？」等、母が移転後にも言っていたのを聞いた覚えがありますが、そういう母は、箕面で小学校教員を約40年していたのですが…！そして、祖父が亡くなってから母と私はそれぞれに、祖父たち先生と学生の皆さんが木を植え、外大箕面キャンパスを作ってきた経緯を思い出し、そのキャンパスに祖父の面影を感じ、追うようにキャンパス横の間谷住宅に引っ越してきました。

しかし、私が引っ越してきてすぐ、北急が延伸され、その一つ目の駅前に移転と聞き、とてもがっかりしたのを覚えています。その後、まさかその阪大箕面キャンパス跡地をどうしていくのかを箕面市議の立場で考えることになるとは本当に不思議に思っていました。初期の市側の答弁では、「今のキャンパスを有効活用してもらえるように教育施設の誘致」のような話も出ていたので、祖父たちの思いの詰まった図書館はじめ、緑の多いゆとりのある豊かなキャンパスが活かされた利用を期待というより、そうなるのだろうと感じていました。

ところが、どんどんと移転の期日が近づいていても、スポーツ施設？切り売りする？半分は貸し出す？全部マンションになる？？と憶測が飛ぶだけでしっかりとした進捗も何もわからないまま…でどうなってしまいうだろうと不安になっていき、そして、市の説明には何の心も感じられず、今の箕面キャンパスにおられる先生方はどう感じておられるのだろう…と考えるようになりました。野党側の私が要望をすると躍起になって、絶対に要望を实らせないような姿勢を感じていたので、大切にしたいからこそ意見を言うことを控え、周りの方に迷惑をかけることになってはいけないと動かずにいましたが、「マンションにすべてなるらしい、どうなってるの？」と言う声を多くいただくようになり、いてもたってもいられなくなり、動き始めました。祖父が図書館長をしていたことも聞き、ネットではその時の文献も見つかったり、その時の思いにも触れることができ、阪大箕面キャンパス図書館が箕面市立図書館と変わっていくことについて、祖父はどう思うのだろう、などと思いをはせ、そこから、祖父を知って下さる先生方や学生だった皆さんにもついに繋がる事ができ、今回のイベントにも参加をさせていただくこととなりました。

沢山の出会いをいただき、さまざまなキャンパスへの思いに触れ、緑の貴重さも痛感し、守るべきものが見えてきました。あきらめず、「守るべきを守らなければいけないんだ」と今、感じています。新キャンパスについても、「市民の声も、学生の皆さんの声も聞いていないような図書館や生涯学習センターにしてはいけない！」との声も聞こえています。跡地も新キャンパスについても、権力を持つ側の一方的な裁量で決められることがないように、市議として、外大にご縁をいただいた家族として、みなさんと共に一緒に作っていく、まさに、祖父が箕面キャンパスに移転し、新しいキャンパスを作り上げたように動いていきたい…と思っています。

プロジェクト申請時の計画

平成30年度 大阪大学研究費補助金 地域連携推進プログラム 委託番号: H30-共創07
 課題の名称: 健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト
 件名調査者の氏名・所属: 言語文化研究所・深尾薫子

1. 研究成果の概要とその新規性・優位性

大阪大学箕面キャンパス跡地利用計画

大都市周辺は2010~2040年にかけて地方にもまして高齢者人口が増加
 箕面は特に高齢化率が高く、2050年までに人口3,4人に1人が65歳以上。
 2050年の人口構成(予測)は50歳代と75歳以上人口のピークがある。しかも高齢者の95%が自宅居住。
 年収1500万円世帯が3,63%と高所得世帯が全国自治体でもトップ。しかし、新卒の居住者は地域との結びつきは弱い

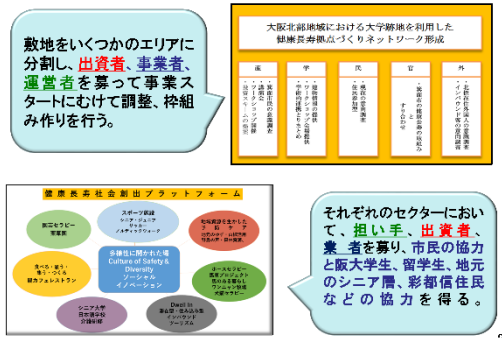
優位性 若い世代と高齢世代高所得層のニーズ 外国語学部 多文化共存 北摂の豊かな自然 大学施設の有効活用 コストと環境破壊の低減
健康増進をキーワードに地域の自然と人と世界をつなぐ拠点の形成

2. 研究開発目標とその妥当性

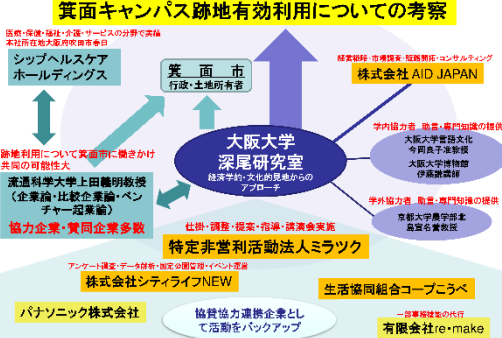
目標 大阪大学箕面キャンパスという土地を受け継ぎ地域の自然と人と世界をつなぐ拠点に



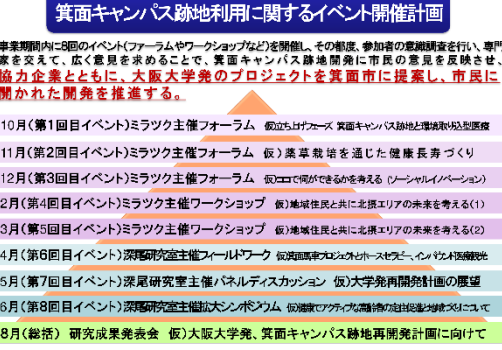
2. 研究開発目標とその妥当性(続き)



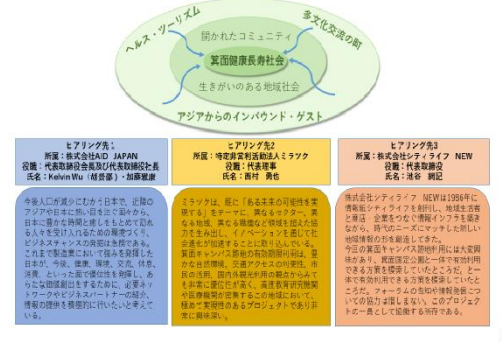
3. 手段・計画・チーム(体制)の概要とその妥当性



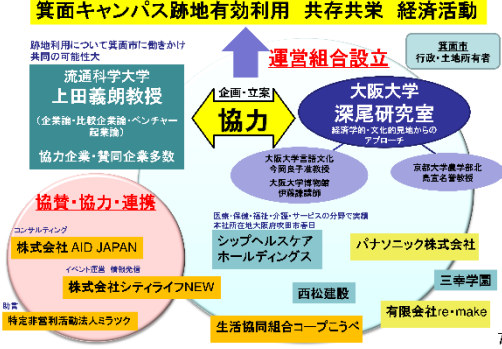
4. 推進スケジュール



5. 社会的・経済的インパクト



6. 手段・計画・チーム(体制)の概要とその妥当性



7. 必要経費

項目	H30T1 (円)	H30T2 (円)	合計 (円)	備考
借入金(借費・借入金)	0,000	0,000	0,000	
借入金(借入金)	0,000	0,000	0,000	
借入金(借入金)	100,000	100,000	200,000	
借入金(借入金)	250,000	250,000	500,000	
借入金(借入金)	10,000	10,000	20,000	
借入金(借入金)	2,500,000	1,500,000	4,000,000	
借入金(借入金)	50,000	50,000	100,000	
合計	3,030,000	1,970,000	5,000,000	

今後の展望

大阪大学言語文化研究科
教授 深尾葉子



新たなソーシャルイノベーションに向けて

大阪大学箕面キャンパスの跡地利用に、市民や地元の住民、大学関係者は何を望んでいるのか。阪大外国語学部、大阪外国語大学に縁のあった学生、卒業生、留学生は、大学の思い出の土地にどんな思いを抱いているのか。高齢化が進むこの地で、真に持続的で、人々の健康や、生活環境の充実化、地域の自然環境を活かした利用方法はないのか。

そういった課題のもとにスタートした本プロジェクト。そこに浮かび上がってきたのは、

- ① 地域の人々と、この立地と環境を求めて世界から訪れる人が交流し、新しいつながりが生まれる場所
- ② 地域の自然や在来資源が活かせ、人と動物がともに生きることのできる場所
- ③ 健康増進やスポーツなどをテーマにこれまでにないさまざまな年齢の人々が参加できる場所
- ④ 国際色豊かな文化や食を楽しめ、人々の相互理解を促進する発信基地

といった要素であった。そしてプロジェクトを通じて、地域住民や近隣の市民、大学関係者の新たなつながりが生まれ、新しい動きが誕生した。

そもそもソーシャルイノベーションとは何か。社会に新たな課題や問題がある時、人々が潜在的な需要や、アイデアをもちより、これまでつながっていなかった回路がつながりあって、新たな可能性と人々の渦が生じ、その相互作用によってまったく新しい事物や行動が生み出されること。それは決して「単独」の「発明」や「行動」によってもたらされるものではなく、人と人のつながりの中にたち現れるものであろう。その意味では、今回の一連のイベントは、すでにあつた需要や人々の思いが、テーマごとの活動によって相互に繋がりあい、潜在的な「思い」が可視化され、それによって新たな動きが紡ぎ出される行動のループを作り出したといえる。そしてそこで交わされた意見をまとめたこの報告書もまた、あらたなイノベーションのためのツールとして次の動きを引き起こしてゆくことだろう。

少子高齢化が進む日本で、真に必要なのは、より広く世界に開かれた場の創出であり、それを地域の住民や企業や行政の手で持続的に運営し、新たな就業や生活の場を創り出すようなそういうとりくみであろう。

大阪平野を眼下に望む美しいこの間谷の地を、次の世代に受け継ぎ、もともとあつた美しい里山のもたらす豊かな環境と命を活かし、人間と動物がともに生活世界を共有し、市民が自分たちの場所として活用する場を創りだし、その活動そのものが新たなビジネスチャンスとなって地域に豊かさや活力をもたらすこと、それが次世代に受け継がれる真の開かれたまちづくりの使命なのではないだろうか。

今回の一連の試みは北摂の地をベースにイノベーションの連鎖が起きる一つの大きなきっかけとなり、すでに新たな繋がり渦がまわり始めている。

執筆者一覧(執筆順)

深尾葉子(大阪大学言語文化研究科教授)

今岡良子(大阪大学言語文化研究科准教授)

伊藤謙(大阪大学総合学術博物館特任講師)

福井康太(大阪大学法学研究科教授)

上田義朗(流通科学大学商学部教授)

神前進一(元大阪大学人間科学研究科准教授)

岡山栄子(有限会社 re・make 代表取締役)

岩城あすか(箕面市立多文化交流センター館長)

村川まみ(箕面市議会議員)

健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト報告書

大阪大学 Innovation Bridge グラント

【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】

「健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト」

発行者：研究代表者 深尾葉子

発行日：2019年8月31日

大阪大学 Innovation Bridge グラント

【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】

健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト報告書

研究代表者：深尾葉子